

日本海海戦：その情報通信からの視点3

— 波濤万里 ロジェストウェンスキーの通信戦略 —

田中正智

(電気通信大学歴史資料館)

はじめに

“情報”それは人間そして人間の集団の行動を左右する。ロシア第二太平洋艦隊の東洋遠征に際しても情報が十二分に活用された。

ここに『千九百四、五年露日海戦史』[1]をはじめとする文献を参照しながら、疎通した情報に着目して第二太平洋艦隊の航跡を辿り、司令長官ロジェストウェンスキーが自ら率いる艦隊の東洋遠征を成功させるべく採用した通信戦略、すなわち情報の収集／伝達手段を明らかにしたい。

本稿では情報疎通／収集手段を、その内容ごとに次のように区別する。

[]：命令／報告書・公文書 []：国際電報
【 】：無線電信 { }：旗旒信号／セマホール／手旗／発光信号など、伝統的な艦船相互の通信手段
《 》：新聞／刊行物 []：記録文書
〈 〉：私信／私文書

なお本文中の引用／参照部分の出典について、文献[1]はその記載を省略した。

日露開戦直後の1904年春には、第二太平洋艦隊の東洋派遣がロシア政府部内で議論され始めた。旅順を根拠地とするロシア太平洋艦隊と合同して、東郷平八郎率いる日本艦隊を撃滅しようとする戦略である。

しかし、大艦隊の長途の航海の成否と海戦の勝敗の予測、加えて莫大な経費支出をめぐる甲論乙駁、政府部内の議論は紛糾した。それでも同年4月、太平洋艦隊のマカロフ司令長官が旅順港外で旗艦「ペトロパブロフスク」の接雷沈没により戦死したのを契機に、派遣論が大勢を占めた。

1904年4月21日 戦死したマカロフの後任としてスクルイドロフ中将が旅順に向けて出発したその日、皇帝ニコライⅡ世は、侍従武官であるロジェストウェンスキー少将を第二太平洋艦隊の司令長

官として任命した。

艦隊の編成は、外国から購入予定の艦船を含めて未定のまま、開戦後任官した士官、商船から採用された士官あるいは予備役の士官が招集された。そして海を見たこともない山村の農民まで水兵として徴兵され夏までに配乗を終えた。敵艦の距離を計る測距儀、大砲の照準器、望遠鏡も同様に間に合わされた。

肝腎の無線設備は、A. S. ポポフが設計しドイツのシーメンス社に発注した「スラビ・アルコ式」(С л а б и — А р к о : 栄光の電弧) (注：電弧は電波の意) があわただしく装備された。電信兵の養成が間に合わないので、シーメンス社の無線技師が艦船に同乗して、航海の途上で兵士の教育・訓練に当たることになったのである。

8月23日 宮廷で御前会議が開かれた。皇帝ニコライⅡ世はじめ、海軍総帥アレクセイ・アレクサンドロウイッチ、アレクサンドル・ミハイロウイチ大公、海軍大臣アウエラン、陸軍大臣サハロフ、開戦直前まで露日交渉に当たった外務大臣ラムズドルフなど貴顕・高官の列席する中でロジェストウェンスキー司令長官は所信を述べた。

〔・・・支那海ニ於ケル舟山列島(注：上海南方杭州湾外の島嶼)マテノ距離(約一萬八千哩)ヲ航進センニハ一晝夜二百哩ノ速力(注：時速約15km)ニテ九十日ヲ要シ尚石炭搭載ノ爲諸港ニ碇泊スル日數ヲ六十日ト豫定シ合計約百五十日即五箇月ヲ要スヘシ故ニ艦隊ニシテ九月十四日ニ出發セハ一月ノ末若クハ二月ノ初ナラサレハ上海ニ達スルコト能ハサルヘシ猶且石炭二十四萬噸ノ搭載ヲ要ス次ニ航海中ニ於ケル艦隊ノ警戒ハ困難ニシテ殊ニ軍事視察員(注：諜報員)ノ情報ニヨレバ「ベルト」海峡(注：バルト海から北海への出口スカゲラン海峡)、北海及南支那海ニ於テハ日本側ヨリ妨害ヲ被ル危険アリ・・・〕
ロ司令長官は、東航の途上で日本海軍の襲撃を

予想していた。

結局この御前会議で第二太平洋艦隊は、ロ司令官の主張通りウラジオストク軍港の解氷時期に合わせ、かつマダガスカルにおいて外国から購入予定の軍艦7隻の到来を待つことを前提として、この年の秋にクロンシュタット軍港を出航することが決定された。

1. 第二太平洋艦隊の航跡の区分

クロンシュタットから対馬まで、波濤はるか1万8千マイル(33,000km)におよぶ艦隊の航跡を便宜的に次の9つに区分した。

- ① クロンシュタット～リバウ～スカーゲン岬～北海
- ② いわゆる北海事件の海域
- ③ 北海からタンジールまで
- ④ タンジールでスエズ運河経由のフェリケルザム枝隊と別れノシベまで
- ⑤ ノシベ在泊 焦燥の2カ月
- ⑥ ノシベからインド洋を縦断 マラッカ海峡を通過 カムラン湾
- ⑦ カムラン湾在泊
- ⑧ ワン・フォン(ホンコーへ)湾ノクアベ湾在泊 第三太平洋艦隊と邂逅
- ⑨ ウラジオストクに向けて

2. 情報に着目した

第二太平洋艦隊の航跡

首都サンクト・ペテルブルグの沖の小島に構築されたクロンシュタット軍港。そこに集結した艦隊将兵の士気は高かった。

そのクロンシュタットから対馬まで、第二太平洋艦隊は長途かつ困難な航海を、意気揚々と、あるいは失意のうちに、はたまた焦燥を胸に、航海し停泊を重ねたその航跡を、艦隊を取り巻いた情報に着目しながら辿れば、あるいは次のように要約できよう。

2.1 クロンシュタット～リバウ～

スカーゲン岬～北海

以下の記述は図3-1を併せて参照されたい。

ロジェストウェンスキー少将率いる第二太平洋艦隊は、クロンシュタット軍港に集結した。

その陣容は次の通りであった。

戦艦「クニャージ・スウォーロフ」(旗艦)「インペラートル・アレクサンドル三世」「ボロジノ」「アリヨール」「オスラービヤ」「アドミラル・セニャーウィン」「シソイ・ウェリーキー」「ナワリン」、巡洋艦「アドミラル・ナヒーモフ」「アウロラ」(オーロラ)「ドミトリー・ドンスコイ」「スヴェトラーナ」「アズマール」「ジェムチュグ」、駆逐艦「ブイヌイ」以下10隻、工作船「カムチャッカ」、病院船「アリヨール」、運送船「マライヤ」ほか数隻。

9月11日 艦隊クロンシュタット軍港出航

出航に先立ち、皇帝ニコライ二世が臨席して盛大な出航式が行われた。皇帝はロ司令官はじめ艦隊各指揮官とともに神に祈りを捧げた後、一同を激励した。旗艦「クニャージ・スウォーロフ」に乗組んだ艦船修理担当の造艦技師ポリトフスキーは、その出航式の様子を新婚の愛妻に書き送っている。

〈我が艦隊は昨日を以てクロンスタッドを出発せり陛下は御召艦アレキサンドリヤにて艦隊を見送られ艦隊を一周せられたり終始音楽を奏し萬歳を歡呼せり艦隊もそれぞれ之に向て答禮を行ひ最も壯觀を極めたり轟々たる砲聲濠々たる砲煙天に響き海を覆ひて隣艦を観る能はざる如き事さへもありき・・・〉^[2]

同日午後、艦隊はレーヴェリ(現エストニア・タリン)に向けて出航した。

航海中、艦隊の「スラビ・アルゴ」(栄光の電弧)式無線電信機と運送船「キタイ」ならびに「コレア」に装備した「マルコーニ」式無線電信機との交信を行い、「マルコーニ」式を調整した。

9月13日 艦隊レーヴェリ泊地に投錨

リバウ回航までの約1カ月間、付近の海域で戦闘訓練を実施した。しかし肝心の無線電信については

〔「ロジェストウェンスキー」少将ノ注意ニ依り施行サレタル無線電信ノ実習ハ「レーウエリ」ニ於テモ最初充分ナル成績ヲ得ス〕前途の見通しは必ずしも明るくなかった。

10月9・10日 皇帝ニコライ二世、再度艦隊を親閲

10月11日 艦隊レーヴェリ泊地を抜錨

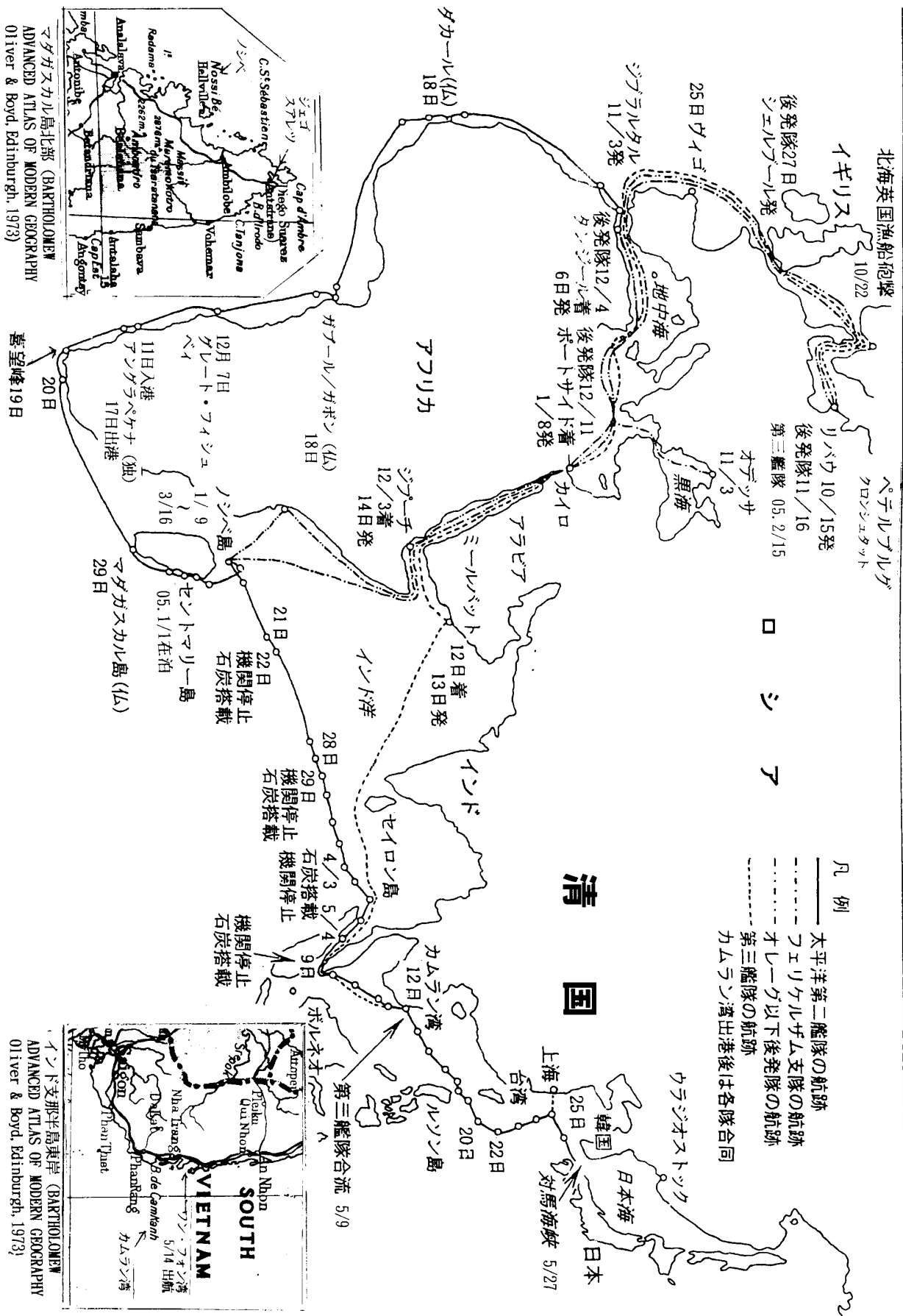


図-1：第二太平洋艦隊の航跡 川野光明編集『日露戦争関係年表』（日本海海戦100周年記念事業1000人委員会、2003.10）を基に作図

10月12日 艦隊リバウ（現ラトヴィア・リエパヤ）港外に投錨

翌日、ロ司令長官は海軍技術会議から、新造戦艦ボロジノの復元力に関する注意を要する技術資料を接受した。

10月15日 艦隊リバウ港外を抜錨

ロシアの領土を離れて東方遠征の航海に上るに際して、ロ司令長官は海軍大臣に出撃報告書（巻頭グラビア図1参照）を提出した。

10月17日 艦隊ランゲラント島（デンマーク領）ファッケベルグ灯台付近に投錨

翌日、艦隊は風力の衰えを待って錨地を抜錨した。

10月20日 艦隊スカーゲン岬（デンマーク領）沖に投錨

停泊中にロ司令長官は、勅命により海軍中将に進級し侍従武官長の称号を授けられた。ロ司令長官は、単なる海軍提督ではなく皇帝の名代として艦隊を統率する身分となったのである。

艦隊は次の情報を得た

〔我第二太平洋艦隊ヲ途中ニ邀撃シ東航ヲ阻碍セントテ日本ハ各種ノ手段ヲ運ラシアリトノ風説息マス既ニ我カ艦船ニ危害ヲ加フル準備成レリトノ情報サヘアリテ海軍省ニ於テモ之ヲ黙過シ難ク六月ヨリ丁抹海峡方面ニ哨戒隊ヲ配置シ尚各要所ニ望楼ヲ建設シテ怪シキ船舶ノ通航ヲ監視シ又小汽船ヲ数隻備入シテ同哨戒ノ目的ヲ以テ海峡ヲ巡邏セシメタリ〕

石炭積載を開始したところ、一隻の載炭船がスカーゲン駐在ロシア副領事からの書面をロ司令長官に提出した。曰く

〔國旗ヲ掲揚セサル水雷艇七隻海上ニ現レタリ〕

ロ司令長官は、この情報がかねて接受していた情報を符合するところもあることから、これを軽視できないものと判断して直ちに石炭積載を中止、夜間の停泊を避けて出航した。そして出航後は安全のため、艦隊を6枝隊に分割して行動することとした。すなわち

第1枝隊：駆逐艦「プレスチャシテー」「ペスウブリロチヌイ」「ボーズルイ」、運送船「コレヤ」。シャモフ中佐が指揮してシエルブール、タンジュールを経由してフェリケルザム枝隊（後述）に先行して地中海のアルジェに向う。

第2枝隊：駆逐艦「ベドウイ」「ブイヌイ」

「ブルーウイ」、運送船「キタイ」。パラノフ中佐が指揮して、本隊と同航。

第3枝隊：巡洋艦「スェトラナ」「ジェムチウグ」「アズマール」。シエイン大佐が指揮してフランスのシエルブールあるいはブレストを経由してタンジュールに先行する。

第4枝隊：巡洋艦「ドミトリー・ドンスコイ」「アウロラ」、工作船「カムチャッカ」。エンクイスト少将指揮の下にタンジュールに先行する。

第5枝隊：戦艦「オスラビヤ」「シソイ・ウエリーキー」「ナワリン」、巡洋艦「アドミラル・ナヒモフ」、運送船「メテオル」「マライヤ」。フェリケルザム少将が率いて本隊と共にタンジュールに向う。

本隊：戦艦「クニャージ・スウォーロフ」「インペラートル・アレキサンドル」三世「アリヨール」、運送船「アナズイリ」、曳船「ルーシ」。ロ司令長官が直率した。

なお、以下の記述で特にことわらない限り“艦隊”とは、上記の本隊を指す。

同日夜、艦隊はスカーゲン岬沖を抜錨、ロ司令長官が接受した限りでは日本の水雷艇などが待ち受ける恐怖の海域に入った。もとより水雷艇云々は、日本の諜報機関があわよくば第二太平洋艦隊の東航を断念させるべく流布した、偽りの情報にすぎなかった。

2.2 北海／北海事件の海域

10月21日 北海ドッガーバンク事件の始まり

午後、ロ司令長官は無線電信で各枝隊の配列を指示した。

同日夜、旗艦「クニャージ・スウォーロフ」は運送船（工作船）「カムチャッカ」より無線による緊急通報を受信した。以下、巡洋艦アウロラの艦長エゴリエフカ大佐の電報日誌からの引用である。

午後8時55分

「カムチャッカ」 【水雷艇追跡シ來ル】

「スウォーロフ」 【貴船ヲ追跡スル水雷艇ハ何レノ方向ヨリ來リ又幾隻ナルヤ】

「カムチャッカ」 【攻撃ヲ四方ヨリ受ケントス】

「スウォーロフ」 【水雷艇ハ幾隻ナルヤ精シク電報セヨ】

- 「カムチャッカ」 【水雷艇ハ約八隻ナリ】
「スウォーロフ」 【貴船ニ接近シ居ルヤ】
「カムチャッカ」 【一縫以内ニ在ルモノト以
外ニ在ルモノトアリ】
「スウォーロフ」 【魚雷ヲ発射セシヤ】
「カムチャッカ」 【更ニ不明ナリ】
「スウォーロフ」 【今貴船ハ何レノ方向ヘ
航進スルヤ】
「カムチャッカ」 【南七十度東、艦隊ノ位置
ヲ示サレタシ】
「スウォーロフ」 【水雷艇カ貴船ヲ追跡シ居
ルヤ貴船ハ先針路ヲ轉シ危
険ヲ避ケタル後經緯度ヲ示
スヘシ其時隊ノ針路ヲ示サ
ン今貴船ハ如何ナル針路ヲ
取りツツアルヤ】
「カムチャッカ」 【示スハ危険ナリ】
「スウォーロフ」 【貴船ハ今モ尚水雷艇ヲ
見ルヤ】

午後11時20分

- 「カムチャッカ」 【見エス】

午後11時30分

- 「スウォーロフ」 【位置ヲ示サレヨ】

エゴリエフ大佐は電報日誌に次のように付記した。「上述のような交信の後、本職はじめ将校一同は、今後どのような措置を執るべきか協議した。しかし本艦の受信機に入感はあるものの、敵国である日本は遠隔の地であり、しかも目下艦隊が航行しているのは欧州国の領海で、友好国の艦船が頻繁に往来している。この海域で戦闘が突発することは極めて理解しがたく、ますます神経が興奮して事情の真相の判断に苦しみさまざまな状況に気を奪われて（注：以下の）戦闘が開始された時刻を記憶していない」。

10月22日 北海ドッガーバンク事件（ハル事件）

〔午前零時五十五分新造戦隊戦艦ノ「ドッガーバンク」沖ヲ通航セントスルトキ「クニヤージ・スウォーロフ」ノ艦首ヲ左右ヨリ横斷シテ逆航スル無燈ノ船影ヲ多数認メ「スウォーロフ」ハ浮流機雷ヲ撒布シタル恐アリトテ轉舵スルト同時ニ枝隊ノ諸艦ト共ニ探照燈ヲ照射セシカ水雷艇ニ酷似スルニ船ヲ瞥見シ「スウォーロフ」以下一二ノ戦艦ハ之ニ向ツテ砲火ヲ開キシニ忽チ二船其影ヲ隠シ同時ニ「ランチ」型ノ船數隻ヲ發見

セリ是ニ於テカ此「ランチ」ニ對シテハ射撃スヘカラスト命令セシモ一部ノ砲員ハ「ランチ」ヲ水雷艇ナリト信シテ射撃ヲ止メス約十分間其儘繼續ス後日ニ至リ我砲火ノ爲漁船ノ損害ヲ受ケタルモノ數隻アリシヲ知レリ〕

巡洋艦アウロラは味方の砲弾を被弾し艦俣が重傷を負い、後に死亡した。“浮流機雷ヲ撒布・・・”と見て、開戦劈頭の太平洋艦隊旗艦「ペトロパブロフスク」の触雷沈没と司令長官マカロフの戦死が、ロ司令長官の脳裏に活写された。あるいは、その潜在的イメージから漁船の通過が“機雷撒布”に見えた・・・。

2.3 北海～タンジェール

10月22日、午前三時 戦艦枝隊は英国海峡に入った。

午後9時頃シエルプール沖を通過。先行した同港に駆逐艦が入港している筈なので「スウォーロフ」が無線電信で呼んだところ応答あり。曰く、

- 【無事ニ入港シ佛國官憲ハ停泊時間ニ制限ヲ加エス軍需品ノ外總テ必要品ノ積載ヲ許シタリ】

10月26日 艦隊ヴィゴ（スペイン）入港

石炭の搭載は認められたが、搭載量に制限が加えられた。

戦艦「アリヨール」は400トンの搭載を認められた。次の寄港であるタンジェールまでは900トン必要である。

- 〔・・・税關看守兵ノ監視ヲ眩ス爲メ彼等ノ一團ニタ食ト多量ノ葡萄酒ヲ饗シ其量ヲ過ゴシテ眠ラシメント謀リタルニ果セル哉漸ク翌朝七時ニ到リ醉顔朦朧ノ體ニテ船室ヲ出タリ石炭搭載ト同時「バラス」ヨリ眞水ヲモ搭載セリ・・・〕^[3]

10月27日 艦隊ヴィゴ入港中

ロ司令長官は海軍省宛てに電報を発信した。

- 〔此後各枝隊ハ指定地ニ向ツテ航海ヲ繼續ス、英国ノ新聞ハ「ドッガーバンク」ノ事件ヲ掲載シ現場ニ翌朝マデ駆逐艦一隻殘留シタルモ遭難漁船ニ對シ何等ノ救助ヲ與ヘストテ大ニ激昂セル態度ヲ示シタリ、然レドモ事實我枝隊ハ一隻ノ駆逐艦ヲモ伴ハス又如何ナル艦艇モ現場ニ留メサルナリ枝

隊カ汽走セル「ランチ」ニ救助ヲ與ヘサリシハ同船ハ飽クマテ艦列ヲ横キラントシ攻撃ニ参加スルニヤアラスト疑ヒタルヲ以テナリ】

10月28日 ヴィゴ入港中

ロ司令長官は正午に出港を予定していた。

しかし、海軍省から

〔北海ニ於ケル英國汽船撃沈事件ノ落著マデ枝隊ハ「ウキゴ」ニ碇泊セシムヘシ】

との電命を受けた。

そしてロシアとイギリス両政府は、同事件を国際査問会の審理に委ねることに同意し、艦隊から責任者として将校が同査問会に出頭することとなった。

ロ司令長官として言い分は多々あるものの、日本近海に到達することが急務であれば、本国政府の決定にしたがわざるを得なかった。

皇帝ニコライⅡ世は、ロ司令長官に宛て勅電を送った。

〔朕ハ卿及朕ノ貴重ナル艦隊ヲ心ニ忘ルルコト無シ紛議モ程無ク解決スヘシト信ス全露國ノ希望ト確信ハ卿ノ一身ニ集ル】

この勅電に対して長官は次のように奉答した。

〔艦隊ハ各自心ヲ陛下ノ玉座ニ集ム】

10月29日 ヴィゴ入港中

ロ司令長官は海軍大臣に宛て打電した。

〔本職ハ當地ニ於テ艦隊ニ耐スル總テノ交通ヲ全ク遮斷セラルヘシ向後東航ノ遅延ハ回復スヘカラサル損失ヲ招カン事件解決ノ豫定期何日頃ナルヤ返電ヲ切望ス】

10月30日 ヴィゴ入港中

ロ司令長官は前日の電報に重ねて、新戦艦の枝隊だけが抑留されている理由を反問するとともに

〔「ハル」事件ノ證人タルヘキ將校ハ「タンジェル」ニ到着後派遣スルモ差支無カルヘシ】

との返電を海軍大臣宛てに送った。

長官の心情はこの日海軍大臣宛てに重ねて発信された次の電報に、如実に表れている。

〔本職カ「フェリケルザム」枝隊ヲ前進セシメル處置ヲ取消ス必要アラハ直ニ電命ヲ發セラルヘシ又果シテ英國新聞ニ記載セル如ク新戦艦枝隊ヲ前進セシメン爲本職ヲ罷免スル必要アラハ早速斷行ヲ切望ス是本職ノ後繼者ニ於テモ新編制ヲ要スルモノアラント察スレハナリ本職ハ外國ノ一港ニ抑

留セラルル理由ヲ解セス又其目的ヲモ知ラス殘餘ノ枝隊ト連絡ヲ絶タレテハ本職ハ艦隊ヲ指揮シ能ハサルナリ】

10月31日 ヴィゴ入港中

ロ司令長官は北海事件の証人として、艦隊から将校4名を派遣した。

同日夜、長官は本国政府から前進の許可を得た。

11月1日 艦隊ヴィゴ出港

艦隊が出港すると、英国巡洋艦が4隻が追尾してきた。昼間は2マイルの距離、夜間は2～3鏈の距離まで接近した。たまりかねたロ司令長官は海軍省宛て打電した。

〔英艦ニシテスクノ如キ行動ヲ繼續スルニ於テハ遂ニ露艦ヨリ（海軍省からの）命令ヲ待タス砲火ヲ開クニ至ランモ圖リ難ク甚掛念ニ堪ヘス】

11月2日 第一戦艦枝隊タンジュール入港／フェリケルザム枝隊出港

タンジュールで艦隊は歓迎され、何の制限も受けなかった。

同日予定通り、フェリケルザム少将率いる戦艦「シソイ・ウエリーキー」「ナワリン」巡洋艦「スウェトラナ」「ジエムチウグ」「アズマール」などの枝隊は、本隊と別れてスエズ運河経由でマダガスカルに向け出港した。このフェリケルザム枝隊の艦艇は、吃水が浅く運河の通行が可能であった。

2.4 タンジュール～ダカール～ノシベ

11月5日 艦隊タンジュール出港

出港に際して「アズアール」は錨で海底ケーブル引揚げたが、旗艦から旗旒信号での切断を命じて出港した。^[3]

11月9日 艦隊ポルトガル南岸沖

ロ司令長官は無線電で

【「ボロヂーノ」型各艦ハダカール着ノ上ハ二〇〇〇噸以上ノ石炭ヲ搭載スヘシ】^[3]

と命じた。

しかし「アリヨール」の積載可能量は1,100トンなので、同艦はいかにすべきかを無線電で旗艦に問合わせた。^[3]

11月12日 艦隊ダカール入港

入港後、ロ司令長官は石炭補給に関して海軍省から10月28日付の次の電報を受取った。

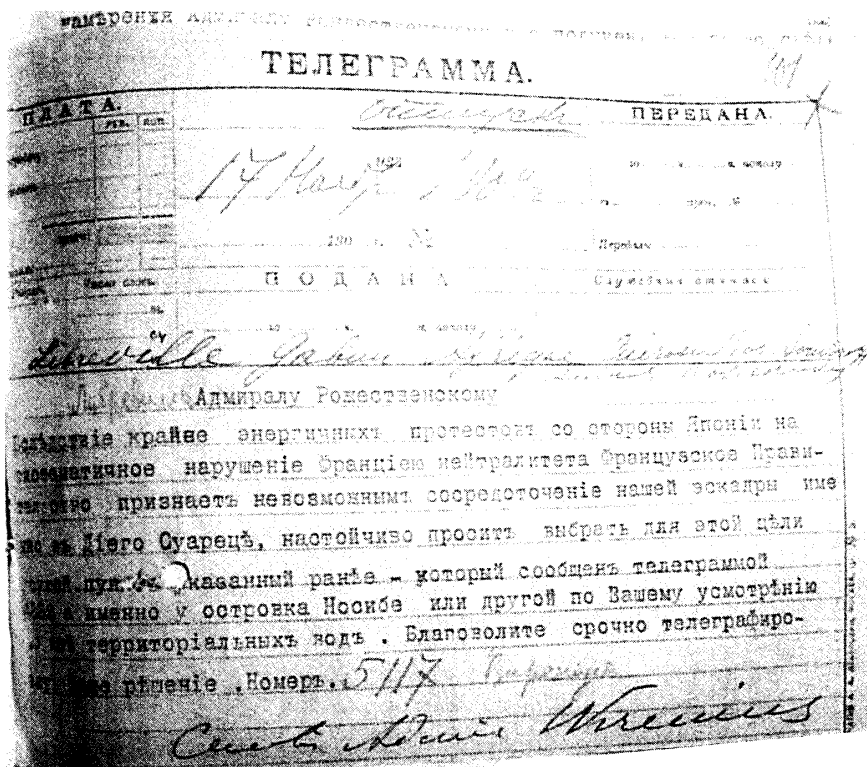


図3-2：電報1

(ペテルブルグ発信ガボン着信)
1904年11月17日(西暦11月30日)
海軍省発

ロジェストウェンスキー提督宛
〔フランスノ中立侵犯ヲ常に強硬ニ抗議シ続ケテイル日本ノ主張ヲ勘案シテフランス政府ハ我が艦隊ノデイゴ・スアレツヘノ集結ヲ不可能ト見テイルソノタメ予メ指定スル別ノ地点、ソレハ電報4682号デノシベ島アルイハ閣下ノ裁量ニ基ツク領海外ノ別ノ地点ト伝エタ、ヲ選ブヨウニ執拗ニ要求シテ来テイルB至急、閣下ノ裁定ヲ電報アリタシ。NO.5117〕
(ロシア海軍中央公文書館所蔵)

〔佛國政府ハ日本ノ抗議ニ因リ露國軍艦ニ佛國港内ニ於テ石炭ヲ積載セシメタル後未三箇月ヲモ過キサルニ復之ニ石炭ノ積載ヲ許ストキハ政治的難問題ノ起ランコトヲ憚リ露國軍艦ニ一旦許可シタル佛國港内ニ於ケル載炭ヲ港内ニ於テセス附近ノ安全ナル灣内ニ於テ行フ様要請セシヲ以テ「フェリケルザム」少将カ「アルジェル」及「ビゼルト」ニ寄港セハ右ノ次第ヲ同少将ニ通知シ随意少将ノ意見ヲ以テ適當ト認メタル沿海ノ一灣内ニ給炭船ヲ「ヂブーチ」ヨリ回航セシメテ石炭ヲ補給スル處置ヲ執ル様貴官ヨリ傳達セラレタシ〕

最初フランス政府は領海内での石炭搭載を認めたが、後に日本政府の抗議を受けて許可を取り消した。ロ司令長官は本国政府に宛て次のように打電した。

〔佛國ノ諸港ヲ載炭地トシテ自由ニ使用シ得ルコトニ佛國政府ノ承諾ヲ得ル様交渉サレタシ、若シ承諾ヲ得サレバ艦隊ノ東航ハ企及スヘカラス而シテ其名サヘ未嘗テ知レサル無人ノ澳灣ニ戰艦ヲ率ヒテ出入スルカ如キ冒険ハ敢エテスル能ハス〕

しかし、政府は国際公法と中立国条約を盾にとってロ司令長官の主張を取上げず、逆に「司令長官の行為が友好国の感情を害する結果を招いたこと、さらにこのような結果を招いたのは、艦隊の出港前に長官が外交上の用意を自ら排斥

したのが原因である」とその注意を喚起した。

それにしても、ロジェストウェンスキー中将が艦隊司令長官として当然知っておかなければならない旅順攻防戦の戦況について、海軍省はこの時点で何も知らせなかった。

11月16日 艦隊ダカール出港

入港中にロ司令長官より秘密命令があり

〔士官ノ信書ニ我艦隊ノ前程及寄港諸中立國トノ間ニ中立ニ關スル諸種ノ協約ヲ記載スルヲ禁ス〕^[3]

なおダカールでは毎月3回、郵便物発送の便があった。またロシアへの電信料は2フランであった。^[3]

艦隊は午後3時、ガボンに向けて抜錨した。ガボンまでの途中の海域で、海図の不備に悩まされた。

11月26日 艦隊ガボン河口に投錨

11月30日 ガボン河口に停泊中

司令長官は海軍省から次の電報を受取った。

〔南アフリ加ノ海面就中「ヅルパン」島ノ全面ニ於テ刻下英國ノ漁船隊出動シテル旨英國政府ヨリ通牒アリ〕

これに対して長官は以下のように返電した。

〔若シ夜中無燈ニテ艦列ヲ横キラントスルモノアラハ遠慮ナク砲撃スヘキヲ以テ斯卡ル事ナキ様豫メ漁船ニ注意セシムヘシト英國政府ヘ復牒サレタシ〕

なおこの日、海軍省はロ司令長官に宛て、次

の寄港地を予定していたジェゴ・スアレツでなく、マダガスカル北の離島ノシベに変更する旨の命令が発信された。しかし、この電報がガボンに着いたのは艦隊の出港後となり、司令長官はその内容を知ることができなかった。

12月1日 艦隊ガボン河口を抜錨

12月2日 艦隊赤道通過

船舶の赤道通過に際して“赤道祭”なる催しが行われるようになったのか、その起源は定かではない。その行事が、第二太平洋艦隊では行われた。筆まめなポリトフスキーは愛妻に向けて克明に書き送っている。

〈十二月二日 今朝スワロフ艦内にて赤道通過祭を始めたり。其祭は先づ赤裸の眞黒な人間が陸戦隊用の砲車を曳き、其砲車の上には(ネプチューン及びヴキーナス)の神に份したる異様のものと、航海長水先案内露國の賤女その他トリトン(神話の海神)等乗りて、百鬼夜行的の行列を以て始められたり。行列には喇叭笛などを吹きたる連中も一列となり、舳部にて奏する樂隊の行進曲にて艦尾の方より艦首の方に練りゆきたり。艦首の高き處にて演劇を始めたり。乗員一同の見物人は艦首に集り、艦橋も檣樓も帆架も皆見物人を以て満たされたり。將校艦長提督の一同は艦橋に見物せり。

演劇者は皆半ば裸にて身體を種々に彩色セリ。墨もあれば赤もあり青も黄も緑もありネプチューン神は麻屑にて作りたる長き髭をつけ三叉鎗を持ちたり。航海長は時計儀望遠鏡六分儀等を持てり。賤女は小兒を懷けり。小兒は(瘦犬を之に擬したり)・・・[2]

軍艦に犬を乗せていたとは何ともほほえましい。

12月6日 艦隊グレート・フィッシュ・ベーに投錨

ポルトガル政府はロ司令長官に対して24時間以上の停泊を認めない旨申し入れてきた。

12月7日 艦隊グレート・フィッシュ・ベィ抜錨

12月9日 艦隊南回帰線通過

12月11日 艦隊アングラ・ペナケ湾に投錨

12月16日 艦隊アングラ・ペナケ湾に停泊中

この日、ロ司令長官は海軍大臣から次の電報を接受した。

〔日本政府ハ佛國ノ中立違犯ハ事實明瞭ナリトテ強硬ニ抗議セシヲ以テ佛國政府ハ

「ジェゴ・スアレツ」ニ我艦隊ヲ集中セシムルハ不可ナリト認メ晨ニ佛國政府ノ指定シタル「マダガスカル」島ノ西側ナル「ノッシベ」灣又ハ「ロジエストウエンスキー」中將ノ適當ト認ムル佛國領海外ナル一地點ヲ擇マレンコトヲ要請セシヲ以テ「フェリケルザム」少將ニハ「ヂブーチー」ヨリ水路誌ニ記載シアル航路即「コマル」列島ノ西側ヲ經テ「ノッシベ」灣ニ直航シ「ジェゴ・スアレツ」ニ寄港ヲセサル様既ニ電命ヲ發シタリ尤モ佛國政府ニ於テモ艦隊ニ要スル水先案内ヲ始メ總テ出來得ル丈ノ便宜ヲ我艦隊ニ提供スヘシト云フ〕

図3-2(電報1)の内容を承知していないロ司令長官は、政府の弱腰と指揮権無視の措置に対し大いに憤慨して、海軍大臣に宛て次のように返電した。

〔小官ハ行動豫定變更ヨリ生スヘキ不測ノ困難ヲ如何ニ處理スヘキヤヲ知ラス直ニ艦隊ハ運送船ヲ失ハントコトヲ恐ルルト共ニ同枝隊ノ集合點變ノ爲進退ニ窮スル次第ナリ若シ運送船ニシテ艦隊ヲ待コト能ハストセハ我艦隊ハ日本ノ巡洋艦ノ鹵獲品タルヤモ圖リ難ク艦隊ニシテ石炭ニ窮スルニ至ラハ實ニ我艦隊ノ最後ト斷念スルノ外ナシ〕

この思い切った電文に加えてロ司令長官は、12月31日付の行動報告でさらに

〔・・・艦隊の回航ハ途中航路ニ當ル諸港灣我ニ好意ヲ有セス物資ヲ補給セス大ニ困難トスル所ナルモ僅ニ精密ナル豫定ヲ遂行シテ其目的ヲ達シツツアル狀況ナルニ突然行動ヲ變更シテ備入運送船ヲモ之ニ耐應セシメントスルハ到底不可能ニシテ突然ノ豫定ハ我前途ノ光明ヲ奪フモノナリ〕

と、具申し〔・・・今ヤ本職ハ艦隊ヲモ喪失スルカ如キ感ヲ有ス〕と結んだ。

折から、カブシタットより来航した汽船は悪いニュースを掲載した新聞を運んできた。

《旅順港ノ日本軍ハ惡戰苦闘久シキニ互リ^{しばしば}屢々強襲ヲ行ヒ遂ニ軍港及泊地並要塞ヲ瞰視シ各地ノ射撃修正ニ便利ナル二〇三高地ヲ占領ス》

この報道が事実ならば、ロシア海軍は東洋における最大の軍事拠点を失うことになり、第二太平洋艦隊が東征する意義が薄弱になる。新聞報道は事実であった。艦隊将兵の士気は低下し

た。

12月17日 艦隊アングラ・ペナケ湾抜錨

12月19日 艦隊喜望峰通過、インド洋に入る

初めてみる特異な光景を『アリヨール艦歴』は記録している。

〔午後四時四十五分艦隊ハ喜望峰ヲ通過ス其末タ岬ヲ廻ラサル前ニ宏大ナル机山(注：テーブルマウンテン)ヲ望見セリ此時頂上ニ雪アリ喜望峰ハ頂上ニ燈臺有スル壯大ナル岩ヨリ成リ一面絶ヘテ草木ヲ生セス此日天候静温海上波市平カナリ〕

翌20日、艦隊は航海中最も高い南緯35度15分に達した。気圧が低下し風速が増した。

12月21日 南アフリカ東岸沖、荒天

艦隊は南半球の暴風圏に入った。そしてこの前後3日間、猛烈な時化に遭遇した。この時期、先進諸国では気象観測が行われ、天気予報も発表され始めていた。しかし、その気象情報を洋上の船舶に通報する手段が未だなかった。

後にロ司令長官は海軍省に報告した。

〔單縦陣ヲ以テ航進スル戰艦五隻ノ隊形ハ稀有ノ奇觀ヲ呈シ幾百萬布度ノ巨艦ヲ一分間六回モ四十呎ノ高キニ掀翻スル海上ノ光景ハ實ニ物凄ク最近ノ後續船ヲ顧レハ其降下スルヤ橋頭ヲ波間ニ没シ又其上昇スルニ際シテハ丘岡ノ上ニ登リタルカ如ク五隻ノ戰艦交々跳躍スルニ似タリ横動毎分ニ八回傾斜ハ本艦ニ在リテハ十二度ヲ超ヘサリシモ巡洋艦「ドミトリー・ドンスコイ」工作船「カムチャッカ」ノ如キハ四十度ニ及ヒ戰艦「オスリヤビヤ」ハ二十度又巡洋艦「アウロラ」ハ三十度に達セリ〕

ロ司令長官は、荒天に関する報告に付加えた。

〔・・・正面或ハ斜ニ逆浪ヲ受ケナハ七十五耗砲ノ砲門ヲ破壊シ戰艦ノ沈没ヲ誘致スルニ至ルヘシト考ヘ特ニ海軍技術會議ヨリ海洋航行中新造戰艦ノ釣合ニ耐シテハ慎重ノ態度ヲ取ルヘシトノ忠告ニ多大ノ注意ヲ拂ヒタリ要スルニ載炭過重ノ状態ニ於ケル戰艦ハ追浪ニ際シテ其成績甚タ良好ナリ〕
戰艦はその堪波性が“甚タ良好”でも小型の艦船にとってはすこぶる困難である。

21日午後8時、曳船「ルーシ」から無線連絡あり。

【艦隊ト同針路ヲ執リ追浪ノ儘續航スルコト困難ナルヲ以テ海岸ニ接近シテ航行シ

タン許可ヲ乞フ】

司令長官は【風凧キテハ翌朝マテニ艦隊ニ合同スヘシ】と、条件を付して許可した。

12月23日 南アフリカ南岸沖

この日、風浪はようやくおさまった。司令長官は無線電信により艦隊に命令第490号を通過した。すなわち、次の停泊地で端艇をおろし

【・・・艦ノ外底ヲ掃除シ海草蠟類ノ附着セルモノヲ除去スヘシ・・・】^[3]

また「カムチャッカ」の機関の石炭燃焼の不具合について、旗艦との間で旗旗信号と無線電信で通信が数回往復した。^[3]

12月26日 マダガスカル島南端沖

10月20日にデンマークのスカーゲン岬を出航以来、6つの枝隊に分れてそれぞれ独自に航海を続けてきた艦隊（本隊）はここで合流した。

12月28日 セント・マリー島まで200マイル

艦隊の無線機は、きわめて遠方の2地点間で交信する無線電信を約4時間にわたって受信した。マルコーニ式無線機による交信と推察された。

12月29日 艦隊セント・マリー海峡に投錨

ロ司令長官は同錨地でフェリケルザム枝隊遭難のうわさを耳にする。それに関連して海軍省に宛てた書簡の一節。

〔「マダガスカル」ニ來ラハ最早眼ヲ蔽フモ東航スルヲ得ン此時何レヨリノ風聞ナルヤ「フェリケルザム」少將枝隊ノ一艦紅海ニ於テ遭難ストノ風説獨國植民地「アングラ・ペケナ」ニ於テ行ハレタリ本職ハ「フェリケルザム」隊ニ就テハ安心シアルモ憂慮ニ堪エサルハ「オレーグ」「イズムルード」及駆逐艦隊ヲ率キル「ドブロツウオルスキー」大佐ノ一隊ト分離シテ本隊ノ跡ヲ追ヒ來ラントスル「スモレンスク」「ペテルブルグ」「ウラル」等ナリ特ニ如上ノ三隻ハ薄弱ナルニ拘ラス過分ノ荷物ヲ搭載シアリ

と、心を砕いている。そして“安心シアル”

「フェリケルザム」隊についても、

〔「フェリケルザム」少將枝隊ノ如キハ縦ヒ遭難ヲ事實トスルモ別段無理ナル行動ヲ命シタルニアラサレハ全ク運命トナスノ外ナシ〕

と、その無事を祈念しながら、

〔本職等艦隊ニ在リテ海上ヲ航進シ二箇月モ水沫ヲ浴ヒシカ學ヒ得タル所ハ更ニ無

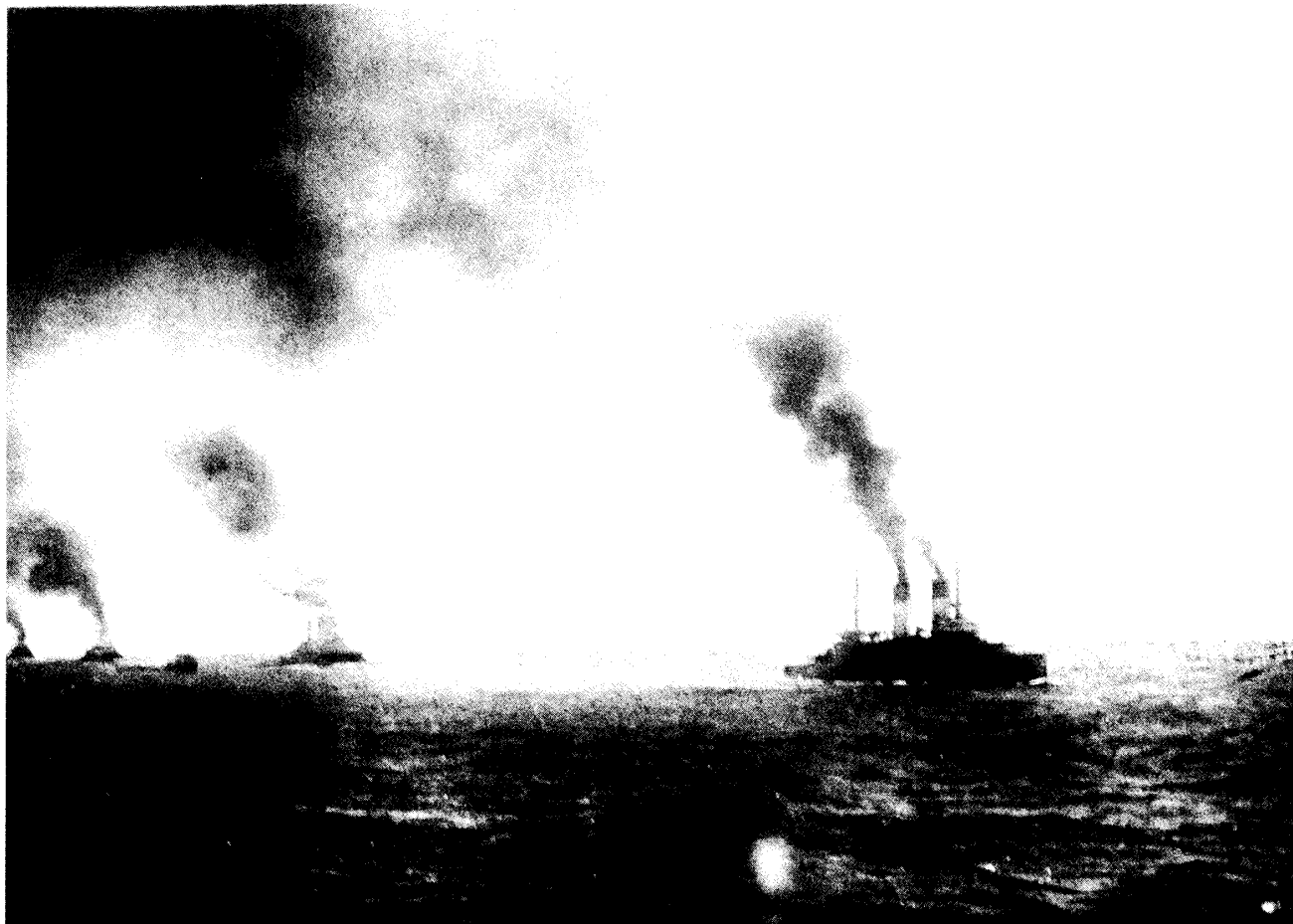


図3-3：マダガスカル周辺海域を航行中の第二太平洋艦隊（ロシア海軍中央博物館所蔵）

シ唯「レーウエリ」ニ於テ少シク學ヒシ所アリシカ如クナルモ既ニ皆忘却セリ今日ハ唯盲者ノ如キ又跛者ノ如キ艦隊ヲ離散セシメス之ヲ率キテ飽クマテ前方ヘ這ヒ出サシメンコトヲ努ムルノミ航海スルコト既ニ三月目ニ及ヘリモ未航路ノ半分モ進行セス去リトテ別ニ豫定ヨリ長ク滞留シタル所モ無シ]

と、半ば悟りの境地に達していることがうかがえる。

午後5時になって病院船「アリヨール」が錨地に到着した。同船は本国と電信交換のためケープタウンに寄港したのだった。^[3]

しかしペテルブルからは何の情報も届いていなかった。

12月30日 艦隊セント・マリー海峡に投錨中

うわさや新聞だけに頼るわけにはゆかない。ロ司令長官は、フ枝隊の動向と旅順港の現状について正確な情報を得るべく、海軍省宛ての電報を託した曳船「ルーシ」をタマタワに派遣した。

またこの日、さまざまな距離から発信された内容不明の無線電信が受信された。

12月31日 艦隊セント・マリー海峡に投錨中
曳船「ルーシ」がタマタワから海軍省からの電報をもたらした。曰く、

〔12月21日日本ノ装甲巡洋艦二隻、輕巡洋艦六隻新嘉坡（注：シンガポール）ノ南方通過ス「モザンビック」海峡ニモ敵艦二隻在リ「フリケルザム」少将ノ枝隊ハ12月28日「ノッシベ」灣到着碇泊セリ〕

この日イギリスの巡洋艦数隻が前方水域からロシア艦隊の動向を監視した。

11月30日付海軍省発の電報の内容を承知していないロ司令長官は再び怒った。運送船一隻をジェゴ・スファレッツに派遣し、同地で艦隊を待合せていた運送船をセント・マリーに回航するよう命ずるとともに、曳船「ルーシ」をタマタワに派遣して海軍大臣当て、次の電報を発信させた。

〔「フリケルザム」少将ノ枝隊ヲ「ノッシベ」ニ回航セシメタル處置ハ精密ナル小官ノ計畫ヲ破壊シタルヲ以テ同枝隊ハ直ニ

「ジェゴ・スアレツ」ニ引返ス様再電命サ
レタシ]

加えて司令長官は

〔同枝隊ニシテ「ジェゴ・スアレツ」ニ入
港セスンハ同港ニ日ヲ期シテ會合スル様計畫
シタル運炭船ハ散失スルニ至ルヘシ〕と警告
した。

他方、フ司令長官宛てにロ司令長官は

〔即刻「ノッシベ」灣ヲ出動シ「セント・
マリー」ノ北方九十哩ナル「アントン・ジ
ル」灣ヘ回航スヘシ〕

と命じた。同灣の奥、ショアゼル港に近いマラ
ンセル村にジェゴ・スアレツと連絡できる電信
局がある。

ロ司令長官がジェゴ・スアレツに固執した理
由はそこに電信局があつたからである。ノシベ
灣から本国との間で電報を送受するには、ジェ
ゴ・スアレツあるいはマユンカまで艦艇を約200
マイル走らせなければならない。

艦隊の将兵は疲れ果てていた。後に提出され
た同31日付のロ司令長官の報告。

〔機械ハ電動機ヲ除ク外皆善ク運轉ス機
關兵焚火兵及信號兵以外ニモ航海ニ疲勞ス
ル兵員少カラス此際艦隊ノ射撃（注：訓練）
ヲ行ハハ三箇月以前「レーウエリ」ニ於テ
行ヒシ時ヨリ成績ハ必不良ナラン

是艦隊ノ前進ノミヲ主眼トスル爲砲熷射
撃、水雷發射、短艇撓槽、水道掃海、水雷
敷設等ヲ演習スル餘暇無キニ因ル特ニ信號
兵ニ在リテハ實ニ其ノ技能修習ニ絶好ノ機
會ナレトモ先頃ヨリ信號旗ノ不足ヲ感スル
ニ至レリ]

1905年1月1日 艦隊セント・マリー海峡に錨泊中

曳船「ルーシ」がタマタワから地元紙を携え
てきた。その記事はおおむね次の通り。

《フ司令官率いる枝隊は「ノシベ」に到着。
日本艦隊の一部はシンガポールに向けて航進中。
マダガスカル付近で日本の駆逐艦1隻と怪しい
船1隻発見。》

1月2日 艦隊セント・マリー海峡に錨泊中

タマタワから31日海軍軍令部長発、ロ司令長
官宛に旅順における艱難な戦況を伝える電報が
運ばれてきた。

〔陸上（注：満州）ノ戦域ニハ變化無ク
陸軍ハ偵察以外ニ攻勢的運動ヲ企畫セス、

我滿洲兵數ハ次第ニ増加ス、旅順港ニ於テ
ハ我軍艦ハ繫泊地ニ於テ日本軍ノ十一吋臼
砲ニテ射撃セラレ相次テ沈没ス、二百三高
地ヲ敵ニ占領セラレシ爲我軍ハ要塞ノ基本
防禦線ニ退キ之ヲ據守ス、彈藥將ニ盡キン
トシ戍兵モ亦困憊ヲ極ム、戦艦「セワストー
ポリ」ト驅逐艦數隻ハ外港ニ出ツ、「セワス
トーポリ」ハ數回敵ノ水雷攻撃ヲ受ケ多大
ノ損害ヲ被ル、浦鹽斯德^{ウランオストク}ヨリ旅順港戦闘材
料糧食等ノ運搬ヲ三回試ミタルモ悉ク失敗
ス然レトモ今後モ尚續テ之ヲ試ミントス]

暗澹たる心境のロ司令長官に宛て同日、海軍
省から第三太平洋艦隊派遣に関する電報が届け
られた。

〔極東ヘ送遣スル第三艦隊ノ準備ヲ取急
キツツアリ第一枝隊ハ戦艦「イムペラート
ル、ニコライ」一世「アドミラル、セニヤ
ウイン」「ゲネラル、アドミラル、アブラ
クシン」一等巡洋艦「ウラジミール、モノ
マフ」二等巡洋艦「ルーシ」ヲ以テ編成シ
海軍少將「ネボガートフ」ノ指揮下ニ一月
二十八日ヨリ二月二日マテノ内ニ出發セシ
メ三月十日頃「ヂブーチー」ニ到着セシム
ル豫定ナリ、同枝隊ニハ給炭船三隻工作船
「クセニヤ」給水船「グラス、ストロガー
ノフ」曳船「スウイリ」病院船「カストロ
マ」を随行セシム、南米ヨリノ軍艦購求ハ
望少シ而シテ第三艦隊ノ第二枝隊ハ戦艦
「スラーウ」「イムペラートル、アレクサン
ドル」三世「パーミヤチ、アゾーウ」「ア
ドミラル、コルニロフ」及五百七十噸級ノ
驅逐艦七隻ヲ以テ編成シ五月中旬ニ出發セ
シムル考ヲ以テ準備中ナリ]

同日追って、次の電報を接受した。

〔「オレーグ」「イズムルード」「リオン」
「ドネツプル」「レーズウイ」（注：ドブロ
ツウオルスキー大佐率いる後続隊）ハ既ニ
「スダ」（注：アレキサンドリア）ニ到達シ
近日將ニ東進セントス但シ「プロンジーテ
リヌイ」及「プロゾルリーウイ」ノ二驅逐
艦ハ不完全ナレハ艦隊ノ格倫斯達士^{クロンシタット}歸還迄
地中海ニ留メ置カルヘシ而シテ「イルツイ
シ」ハ一月二日頃出發セシメ途中何ヘモ寄
港セス運河ヲ通行ス唯一石炭補填ノ爲「ヂ
ブーチー」ニ寄港セシム若シ艦隊司令長官
ニ於テ「イルツイシ」ニ對シ別ニ與フヘキ

命令無クハ「ヂブーチ」ヨリ「ラムポング」ニ向ハシムル豫定ナリ、之「バタバア」領事ヨリノ電報ニヨレハ日本巡洋艦ハ風説ニ依リ頼ヨリ我給炭船ハ「ラムポング」ニ寄港スヘキヲ信シアルヲ以テナリ]

1日に「ルーシー」がもたらした新聞報道に基づいて、ロ司令長官は停泊中の艦隊に警戒体制を命じた。

1月3日 艦隊タング・タング湾へ回航

艦隊は季節風を避けて、タング・タング湾へ回航し錨泊した。ジェゴ・スアレツに派遣した運送船が戻らないので、ロ司令長官は、同船が敵に捕獲される恐れがあるとして、エ司令官に次のように命じた。

[巡洋艦「アドミラル・ナヒモフ」「アウロラ」「ドミトリー・ドンスコイ」を率いて「ジェゴ・スアレツ」に至り、運送船が艦隊に合流するまで護衛すること、そしてその任務達成後は「ノシベ」湾に赴いて、フ司令官ニ“至急艦隊の主力に合流するため、アントン・ジェル湾には寄らずタング・タングに来航すべしとの命令を伝達すべきこと]

1月4日 艦隊タング・タング湾錨泊中

午前10時、「ナヒモフ」より旗艦へ

【本艦々尾陸方面ニ當り明カニ六個ノ火光ヲ認ム・・・】^[3]

との無線電信があった。すわ敵襲かと艦隊は緊張に包まれた。しかしそれは「オスラビア」が不用意に漏らした灯火だった。

1月5日 艦隊タング・タング湾錨泊中

エ司令官の「アドミラル・ナヒモフ」などと入れ違いにこの朝、ジェゴ・スアレツから運送船が戻ってきた。フ司令官の報告に曰く、

[海軍大臣の命令 (注：12月16日参照)ニ依リ「ノシベ」湾ニ到着後機械ノ分解手入レ汽罐ノ洗掃ニ著手セシ所枝隊ニ随伴セル駆逐艦モ亦殆全部大修理ヲ施ササルヘカラス然レトモ艦隊ノ主力ニ至急合同スヘキ必要アラハ更ニ其命令アリ次第行動ニ差支無キ枝隊ノ艦船ヲ抜キ直ニ出動セシムヘシ] 同時に艦隊主計長ウイッテ中佐は次のように報告してきた。

[艦隊ノ勢力増進會議ノ提供セル補助巡洋艦五隻ノ内「ジェゴ・スアレツ」ニ到着セシ

モノハ「クバニ」一隻ノミニテ其他ハ何所ニ居ルヤ不明ナリ巡洋艦「オレグ」「イズムロード」及駆逐艦「グロムキー」「グロズヌイ」ヨリ成ル枝隊ノ消息ハ更ニ聞ク所無シ (注：1月2日の電報参照)

さらにこの5日朝、タマタワから戻ってきた曳船「ルーシー」が旅順港陥落の悲報とともに、海軍大臣からの電報を届けた。その内容は、

〔佛國政府ハ其宣言セル中立ヲ犯セリトテ日本政府ヨリ連リニ難詰セラルルニ因リ軍港ナル「ヂェゴ・スアレツ」ニ第二太平洋艦隊ノ碇泊ヲ許サス同港ニ於テハ他ノ枝隊トノ合同望ムヘカラサルカ故ニ「フェリケルザム」枝隊ハ現在「ノッシベ」湾ニ碇泊シ居ルヲ以テ主隊モ亦同灣ニ赴クヘシ] と命じてきたのに続けて、

〔尚海軍省ニ達シタル情報ニ依レハ日本軍艦ハ「スندا」列島ニ在ルカ如クナルヲ以テ「ラムポング」ニ向ハシメントセル給炭船ハ全部艦隊司令長官ノ指定ニ從ヒ艦隊ニ續航スル様「ノッシベ」湾ニ赴カシム以上ノ情報ハ我領事及派遣員ノ皆接受セル所ナリ復更ニ接受セル報告ニ依レハ日本ノ戦艦二隻、巡洋艦四隻駆逐艦十六隻、補助巡洋艦數隻「マラッカ」海峡及「スندا」島ノ間ニ在リ内補助巡洋艦二隻ハ駆逐艦ヲ護衛シテ「スندا」海岸ニ至リ「ラブアン」附近ニ於テ我給炭船ヲ要シアリ

又澎湖島及臺灣ニ防備ヲ施シタリト而シテ戦艦八隻、砲艦濟遠其他日本駆逐艦數隻ノ沈没ハ確實ト爲レリ]

との情報を伝えた。この時点で日本海軍の戦艦は4隻しかなかったはずだが、誤報かそれとも戦意高揚のための“大本営発表”か・・・。

これら海軍省からの命令と情報によって、ロ司令長官はそれ以後の行動計画の全面的な見直しをせまられた。そして、旅順陥落の情報に将兵は大きく落胆した。

1月6日 艦隊タング・タング湾抜錨

午前6時、戦艦「クニャージ・スウォーロフ」艦長は巡洋艦「スウェトラナ」艦長から、次の無線電報を接受した。

〔本艦ハ「フェリケルザム」少将ノ命ニ依リ「ノッシベ」湾ニ碇泊中ナル獨立枝隊ノ事情ヲ詳報スル爲駆逐艦「ベドウイ」「ボードルイ」

ヲ率キ「ノッシベ」灣ヲ發シ艦隊ノ泊地ニ向ツテ航進中ナリ]

1月3日にフ司令官との連絡のためノシベ湾に向ったフ司令官率いる「ナヒモフ」をはじめとする巡洋艦隊と、フ司令官が本隊に向けて派遣した巡洋艦「スウェトラナ」などは、洋上で擦れ違ってしまった。

午前8時30分、ロ司令長官率いる本隊は「スウェトラナ」などの到着を待たずに、ノシベ湾に向けてタング・タング湾を抜錨した。しかし10時30分、「スウェトラナ」「ベドウィ」および「ボードルイ」は艦隊に合流した^[3]。

1月7日 艦隊ノシベ湾に向け航海中

この日はロシア正教の聖誕祭（クリスマス）の第一日なので、艦隊は祝祭の飾り付けを施し、国旗を掲げ、祈祷式を執行した。ロ司令長官は旗艦「スウォーロフ」の将兵を後甲板に集めて、祝詞を述べ祝杯を挙げた。司令長官は祝詞の中で「將校及兵員カ能ク出征ノ難苦ヲ凌キ滿腔ノ努力ヲ惜マサルヲ感謝ヲ感謝シ且將來愈敵ト遭遇シタル場合ニ於ケル前途ノ功名ヲ祝福」した。その演説は初めに信ずるところを述べ、次に憂慮するところを説きながらも、決意に満ちた言葉で将兵を感激させたという。

そしてこの日、「スウォーロフ」はジェゴ・スアレツまで30マイルの距離から同港に在泊中の巡洋艦「クバン」を無線電信で呼んだが、応答はなかった。

同日夕刻、ロ司令長官は巡洋艦「スウェトラナ」をノシベ湾に先行させた。

午後10時30分、ロ司令長官は無線電信で「スウェトラナ」に概要次のように命令した。

【先航してフェリケルザム司令官に本隊は払暁の頃に到達予定なることを伝えよ。「ナヒモフ」「オーロラ」「ドンスコイ」（注：1月3日参照）がもしノシベ湾に帰投していないときは搜索電信を發せよ。病院船「アリヨール」には貴艦に随行して離れないよう伝えよ。ベドウィと並んだとき手旗信号であまり先航し過ぎないように伝えよ】^[3]

2.5 ノシベ在泊 焦燥の2カ月

1月9日 艦隊ノシベ湾投錨

朝日を浴びて旗艦「クニャージ・スウォーロ

フ」を先頭に、戦艦「インペラートル・アレクサンドル」三世「ボロジノ」「アリヨール」「オスラビア」それに運搬船「カムチャッカ」「アナズリ」「コレヤ」「マライヤ」が湾に入った。主隊、枝隊の将兵は舷側に整列して“ウラー”の歓声を交換し合った。巡洋艦「スウェトラナ」は既に到着、駆逐艦「ボードルイ」「ブイヌイ」曳船「ルーシ」それに病院船「アリヨール」は前夜の内に入湾していた。

ロ司令長官とフ司令官はじめ将兵一同は、タンジュールで別れて以来2カ月余ぶりの再会を喜んだ。しかし・・・満州の戦況、本国内の政治情勢、加えて艦隊の前途に対する悲観的な予測もあって、喜びも半ばであった。

それに当地は、ロ司令長官が望んだ泊地ではない。すでに述べたように、ここには郵便局も電信局もなく、150マイル離れたマユンガまで行かないと電報の送受もままならない。ロ司令長官は艦隊の整備状況を勘案して、ノシベ湾出動を1月19日と予定した。

そしてこの日、ロ司令長官はノシベ湾到着を海軍省に報告するとともに

【行動豫定ノ變更ノ爲僱入運送船ハ今尚散在シテ何時之ヲ集合シ得ルヤ又途中ノ護衛ヲ何如ニスヘキヤ未見込立タス】

と通報した。

海軍省からは入れ違いに次の電報が入電した。

【戦艦「ニコライ」一世「アドミラル、セニヤウイン」「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」巡洋艦「ウラジミール、モノマフ」ヨリ成ル「ネボガートフ」少将ノ一隊ハ一月下旬頃「リバーワ」ヲ出發スヘシ旅順港ハ既ニ陥落シタレハ主隊ハ同隊ト「マダガスカル」ニ於テ合同セントスルヤ將タ又他ニ期待スル場所アリヤ或ハ又合同セスシテ前進セントスルヤ若シ「マダガスカル」ニ待タストセハ三月五日頃「ヂブーチー」ニ到達ノ豫定ナル「ネボガートフ」少将ニ耐シ「ヂブーチー」後ノ行先地ヲ指定スヘシ】

海軍省から重ねて次のように問い合わせてきた。

【巡洋艦「オレーグ」（注：ドブロツウオールスキー枝隊）ハ汽管破裂セル爲「スタ」（注：アレキサンドリア）ニ滞留ス尚一月二十一日頃「ヂブーチー」ニ到着スル筈ナ

ル「ドブロッウオルスキー」大佐ノ枝隊ハ
何如ニセシヤ]

ことここに至ってロ司令長官は自暴自棄の心境に近い。ドブロッウオルスキー枝隊の動向など“こちらが訊きたい”。それでも海軍省に返電して曰く、

〔巡洋艦「オレーグ」「イズムルード」「ドネップル」「リオン」及駆逐艦ノ爲三隻ノ汽船ニ積載スル二萬五千噸ノ石炭ヲ「ヂェゴスアレツ」ニ殘ス「オレーグ」以下ノ諸艦カ「マダガスカル」ニ到着スルマテハ之ニ耐シ何等ノ訓令モ發シ難シ然レトモ本職ハ七日後ニ前進スル豫定ナレハ「ネボガートフ」少將ノ向フヘキ地點ハ自然解決セラレコトナルヘシ]

ロ司令長官は、麾下の第二太平洋艦隊を一日も早くウラジオストクに入港させ休養と整備を行い、日本艦隊が旅順港攻撃をはじめとする前年の海戦で受けた損傷を修理する暇を与えることなく、これを攻撃して日本海の制海権を掌握すべきものと考えていた。

これに対して海軍省は、旅順の太平洋艦隊が全滅したからには、可能な限り第二太平洋艦隊を増強して、日本艦隊に優位な態勢を確保して決戦に臨みたいと構想していた。

海軍省の構想を理解しないではない。しかし、日本近海への到着が遅れば勝機を失う。ロ司令長官は、皮肉をこめた電報で本省に上申した。

〔「ネボガートフ」ノ枝隊ハ四月ニ至ラサレハ「マダガスカル」ニ到着セサルヘシ而モ到着シタル後大修理ヲ要スヘシ又「ドブロッウオルスキー」枝隊モ一月末以前ニ「ノッシベ」灣ニ來ラサルヘシ兎角スル内二月ニ入り漸ク太平洋渡航ノ準備完成スヘケレハ「ドブロッウオルスキー」及「ネボガートフ」カ印度洋ニ航進スル頃本職ハ何處ニ在ルヤ豫想シ能ハサルナリ]

とはいえ艦隊は母国を隔てるこの南海の地で、日本艦船に対する嚴重な警戒態勢を執り続けたのだった。

1月14日 艦隊ノシベ灣在泊中

ロシア暦1905年元旦。この日、ロ司令長官は両陛下から年賀電報を拝受した。不安の中に新年を迎え各艦で祈祷が行われた。その後、将校たちは互いに他の艦船に年賀のあいさつに赴いた。緊張の中での新年の行事である。

〔爰ニ第二太平洋艦隊ハ靜ケキ新年ヲ迎ヘ前途ニ要スル百般ノ準備整ヒ石炭モ搭載シ終リ糧食其他ノ需品多數ノ活牛等ヲ積ミ入レ「スパーデッキ」ハ何トナク賑ハシキ光景ヲ呈セリ

愈々發程更ニ征途ニ上ルノ期ニ至リテハ何人モ知ルモノ無ク徒ラニ蜚語ノ紛々タルモノアルノミ但シ衆説ノ歸スル所今ヤ既ニ其途上ニ在ル一等巡洋艦「オレーグ」(注：1月2日参照)ノ來着ヲ待ツニアルヘシト云フニ於テ一致セリ〕^[3]

司令長官は幕僚と年賀の挨拶は交わすものの、艦隊の行動についての説明や協議は一切しない。戦艦の司令官や艦長ですら“蜚語ノ紛々タル”中に戸惑っている様子を『「アリヨール」艦歴』は皮肉を込めて記している。

それに対して入港中のこととて、新聞による情報が満州での陸軍の敗退を伝える。艦隊将兵の戦意が次第に失われ始める。

1月15日 艦隊ノシベ灣在泊中

ロ司令長官は海軍省に電報を發した。その概要は、

〔東部諸港ニ貯藏シアル機械用材料及糧食ヲ全テ艦隊ニ送致サレタシ、尚艦隊ヘノ物資輸送ニ際シ請負人ニ艦隊ノ集合地點ヲ示ササルヲ要ス之レ艦隊ノ所在地ハ世界ノ注目シアル所ナルヲ以テ自然彼等ハ承知シ得ルヲ以テナリ]

1月19日 出航延期

艦隊は出航準備を整え、ロ司令長官が抜錨命令を下し、運送船の各船長に次の集合地点を示す秘密命令書を配布しようとしたその時、異変が起きた。艦隊への石炭供給を請負っているハンブルグ・アメリカ汽船会社の社長から電報が届いた。すなわち、

〔英國ノ發表シタル中立規則即總テ戰場ヘ赴カントスル軍艦ニ耐シ石炭其ノ他軍需品ノ供給禁止ハ印度洋「マラッカ」海峽南部支那及極東ノ各植民地ニ適用スト云々ニ依リ、洋上ニ於ケル石炭補給モ勿論許サル所ナリ]

として、運送船の安全が保たれる中立国の領海外での石炭補給までも辞退してきた。

ロ司令長官は呆然自失した。これでは東洋に向けて航海を続けられない。直ちに海軍省に対して

〔獨國會社ニ運炭船ノ艦隊随同行ヲ要請セラレタシ〕

と打電した。

ロ司令長官は、出航予定の前日にもハンブルグ・アメリカ会社から〔「マダガスカル」以東ニ會社ノ備船ヲ艦隊ノ要求ニ應シテ行動スル能ハス〕との電報を受け取っていた。

以前から日本政府はドイツ政府に対して、中立国の領海外でもロシア艦隊に石炭の供給を禁じるよう申し入れていた。しかしドイツ側が承知しないので、日本側は“ロシア艦隊に石炭を供給する船舶は全て捕獲する”と言明していたのである。

1月20日 艦隊ノシベ湾在泊中

ロ司令長官は、海軍省からの電報を受け取った。

〔何分ノ令アルマデ「マダガスカル」島ヨリノ出動ヲ見合スヘシ〕

加えて、第二太平洋艦隊だけでは、日本艦隊に対抗する勢力としては弱体なので、

〔ドブロッウオルスキー大佐カ率イル枝隊(注：1月2日参照)ヲ「ノッシベ」灣ニ於テ待合セ之ト合同スヘシ〕

との命令であった。

ロ司令長官は、直ちに返電した。すなわち、

〔今更艦隊カ些少ノ戦闘力ヲ増加スルモ之カ爲貴重ノ時日ヲ消費スルニ耐比スレハ償フ所アラサルヘシ戰域ニ向フ途中ニ於ケル前進ノ澁滞ハ艦隊ノ供給上ニモ乗員ノ精神上ニモ極メテ悪影響ヲ及ホスヲ以テ早速艦隊ヲ率キテ指定地ニ向ヒ出動ノ許可ヲ得タシ〕

と具申した上で、次のように付言した。

〔此ノ上尚「ノッシベ」灣ニ滞在スルニ於テハ小官ハ艦隊統率ノ責ヲ負ヒ難シ又萬事獨斷專行ノ自由ヲ與ヘラレサルニ於テハ艦隊ヲ指揮スル能ハス〕

しかし海軍省からの返電はこない。焦燥の内にロ司令長官は、再びペテルブルグに向けて長文の電報を発信した。曰く

〔徒ニ當地ニ滞留スルハ敵ニ其ノ主力ヲ充分整頓セシムルノ時日ヲ與ヘ又其ノ輕微ナル前進部隊ヲ印度洋ノ南部諸海峽ニ派遣シ以テ同地一帯ノ地理ヲ研究セシメ我艦隊ヲ陥穽ニ陥ルノ準備ヲ得セシムヘシ而シテ「ドブロッウオルスキー」枝隊ノ如キハ有

カト見ルヘキハ僅ニ巡洋艦「オレーグ」一隻ノミ之トテ既ニ其一汽罐破裂シタル儘シアレハ速力遅シ唯「ネボガートフ」枝隊ハ多少後援トシテ頼ムニ足ルヘキ勢力ヲ有スルモ如何ナル状態ニテ「マダガスカル」ニ到着スルヤ未知ルヘカラス此枝隊ト合同シテ出征セントセハ到底六月ヨリ早く日本海ニ達スルコト能ハサルヘシ〕

とした上で、石炭をはじめとする補給方法に次のように言及した。

〔且又「ネボガートフ」枝隊ノ供給法ハ如何ニ組織セラルルヤヲ知ラス今同隊ト合同スル爲出港期日ヲ遷延スルニ於テハ本艦隊ノ供給法ヲ全ク破壊サルル恐レアリ左無クトモ既ニ一旦航程ヲ變更セラル爲亂脈ニ陥リツツアリ〕

1月22日 艦隊ノシベ湾在泊中

その石炭補給についてロ司令長官は、海軍省に重ねて打電した。

〔是迄漢堡亞米利加汽船會社カ正確ニ義務ヲ果シ來リシ契約ノ破毀ハ艦隊ノ爲向後ノ東航ニ耐シ非常ノ打撃ナリ「マダガスカル」出動ニ際シテハ同會社ノ汽船ニハ尚五萬噸ノ石炭アリシカ之ヲ「ノッシベ」灣ニテ艦隊ノ諸艦ニ移載スル必要起ラントハ豫期セサル所ニシテ又之ヲ艦隊ノ運送船ニ移載セシメントスルモ不可能ナルヲ以テ前記會社ノ汽船ヲ本職ノ指定シタル集合地ヘ是非トモ前進セシメサルヘカラス〕

長官は、さらに付け加えた。

〔尚小職ノ意見ニテハ「マダガスカル」ノ碇泊ハ一日長ケレハ一日丈ケ艦隊ニ不利ナレハ獨國政府ヲ通シテ漢堡亞米利加會社ニ説得セシムルコトニ盡力シ尚會社カ飽マテ肯セサルトキハ獨國汽船ニ積殘セル石炭ヲ放棄シ一週間後ニ前進スヘキニ依リ其ノ場合ニハ早速艦隊ノ爲柴根及「バタバア」(注：現ジャカルタ)ニ給炭船ヲ備ヒ置カレタシ〕

1月23日 艦隊ノシベ湾在泊中

艦隊将兵の士気を高揚させるため、ロ司令長官は日本艦隊ノ動静ニ関して、次のように令達した。

〔・・・信據スヘキ情報ニ依レハ我艦隊ヲ誘致セントテ好餌ヲ用意シツツアル日本ノ巡洋艦及補助巡洋艦竝我艦隊ノ所在ヲ發見セ

ント諸灣ノ探索ニ全力ヲ注キツツアル驅逐隊モ全部南方ノ諸水道及印度洋岸ニ集合シ・・・而モ日本ハ我國ニ好意ヲ有セサル同盟國タル英國及其植民地ヲ經テ「マダガスカル」及「ノッシベ」灣ニ居留スル自國ノ派遣員ト電信ヲ交換シテ能ク我各枝隊ノ動靜ニ關スル情報ヲ悉知セサルコト無シ・・・] [司令長官命令第30号]

そしてロ司令長官は、令達を發して射撃などの訓練を開始した。

1月24日 艦隊ノシベ灣在泊中

ロ司令長官は、海軍省から次の情報を接受。

〔日本ハ臺灣及澎湖島ノ周圍十哩ノ海面ヲ交戦地帯ト布告ス、1月2日マテニ大艦ノ南航セシモノ七隻ニ及フ内五隻ハ戦艦ナリ〕

前年、「八島」と「初瀬」が触雷沈没したので、日本艦隊の戦艦は「三笠」「敷島」「富士」それに「朝日」の4隻であった。

1月29日 艦隊ノシベ灣在泊中

ロ司令長官は、ハンブルグ・アメリカ汽船会社を信用できないので、5万トンの石炭に対して既に支払った代金を返済させ、

〔柴棍及「バタバヤ」ニ於テ露國派遣員ノ指定ニ從ヒ兩港ヨリ千五百哩以内ノ地ニ運炭船ヲ準備セラレタシ〕

と海軍省に打電した。

そして、このドイツ運炭船の同航拒否に神経を悩まされたロ司令長官は、その胸中を私信で自宅に書き送った。

＜只今余ハ大ニ不愉快ヲ感シ居ル所ナリ獨國人ハ背信ニモ急場ニ至リテ運炭船ヲ前進セシムルヲ欲セスト斷レリ如何ニ智恵ヲ絞ルモ名案出テ去リトテ躊躇シ居ラハ艦隊自滅ノ原因ヲ造リ日本ニ充分海戦ノ準備ヲ爲サシムル許リナリ而モ追々颱風ノ時期ニ入ラントスルヲ以テ日本人ノ力ヲ借ラスシテ我艦隊ノ半分ハ破壊セラルルコトアラコトヲ恐ル今後ノ成行ハ未知ルヘカラス唯目下ノ所ハ實ニ愧ツヘキ次第ニシテ夫ノ有名トナレル「ハル」事件ヨリモ悪ルシテ一同憤慨シ彼得堡ニ向ツテ熱烈ナル陳情書ヲ提出セリ＞

長官の手紙は続く、

＜余ハ獨國人即チ獨國ノ運炭船カ「マダガスカル」島マテ艦隊ノ爲ニ運送シ來リタ

ル石炭ヲ同島ヨリ先ヘ運送スルコトヲ拒絶セル旨ヲ報告スルトキ獨國ノ運炭船ニ其契約ヲ早速履行セシムルカ或ハ之ヲ放棄シテ更ニ前記二箇所ニ電報ヲ發シ石炭ヲ注文セラルヘシ余ハ自己ノ重任ニ顧ミ大事ヲ誤ラサル爲猶豫セス出動セントス孰レノ方法ヲ取ラルルヤ至急回答ヲ得ンコトヲ要請シ置ケリ＞

手紙はさらに艦隊の士気と食料の窮乏に言及している。すなわち

＜艦隊ノ士気ハ沮喪シ統率日々ニ困難ト爲リ而シテ當地ニ碇泊シ居ラハ補填ノ道無キ糧食ヲ徒ニ消費スル許リナリ「マダガスカル」島ハ何ニ向ツテモ商業ノ中心點ニ遠シ唯豊富ナルハ牛肉ニシテ麥粉穀物油脂野菜等ハ至テ不自由ナリ總テノ食料モ亦二週間餘ヲ保チ難シ何物ヲ食シテ太洋ヲ渡航スヘキカ明日ニモ在「バタバヤ」ノ我派遣員ヨリ和蘭人ノ供給物品到着スヘシト待チ居ル所ナリ青菜ノ罐詰モ殆盡ントシ馬鈴薯ノ如キモ「マダガスカル」島ニ一箇モ殘ラサル有様ナリ＞

艦隊司令長官が野菜の心配までするようでは、はなはだ心もとない。肝心の運炭船の運航について、海軍省とハンブルグ・アメリカ汽船会社との交渉が延々と続いた。

2月7日 艦隊ノシベ灣在泊中

海軍省は旅順の太平洋艦隊が全滅した現在、第二太平洋艦隊の増強こそが、日本艦隊に勝利する戦略と考えていた。しかしネボガトフの第三太平洋艦隊（1月2日参照）の主戦力として期待されていた外国からの軍艦購入計画は失敗に終わっていた。

これに対してロ司令長官は、一刻も早く日本近海に到達して制海権を確保することが急務と信じていた。

ロ司令長官のたび重なる強硬な意見具申に対して皇帝がこの日付で図3-3に示す親電を發した。その内容はおおむね次の通りである。

〔ドブロツウオルスキーノ枝隊ハステニ貴地ニ向カッテ航行中ナリ。故ニ貴艦隊ハ是非マダガスカルニ停マリ同艦隊ノ到着ヲ待ツベシ。ネボガトフ艦隊（注：1月2日参照）ハ、不日リバウヲ出港セン。シカシコノ艦隊ヲマダガスカルデ待ツカ否カハ汝ノ判断ニ委ネル。タダシ同艦隊トノ正確ナ合

流予定地点ヲ、ネボガトフニ伝エヨ】

この親電を受けてもなお司令長官は海軍省に執拗に食い下がった。“ドブロツウオルスキー枝隊が到着してもその艦隊の修理に多くの日時を必要とするだろう。航海に耐えない艦船は前進させないでもらいたい。我が艦隊の必需品は消耗し尽くそうとしている。ネボガトフ枝隊の

来着を待てば、艦隊は補給方法からいよいよ窮地の陥る”と前置きした上で、上申した。

【艦隊ノ戦域ニ出動ヲ制止セラルルニ於テハ艦隊ノ軍紀全ク弛廢セン重罪犯ノ如キ之ヲ處罰スルニ途無シ艦内ニ囚禁スレハ暑熱ノ爲絶息シ其ノ番兵マデモ發病ス】

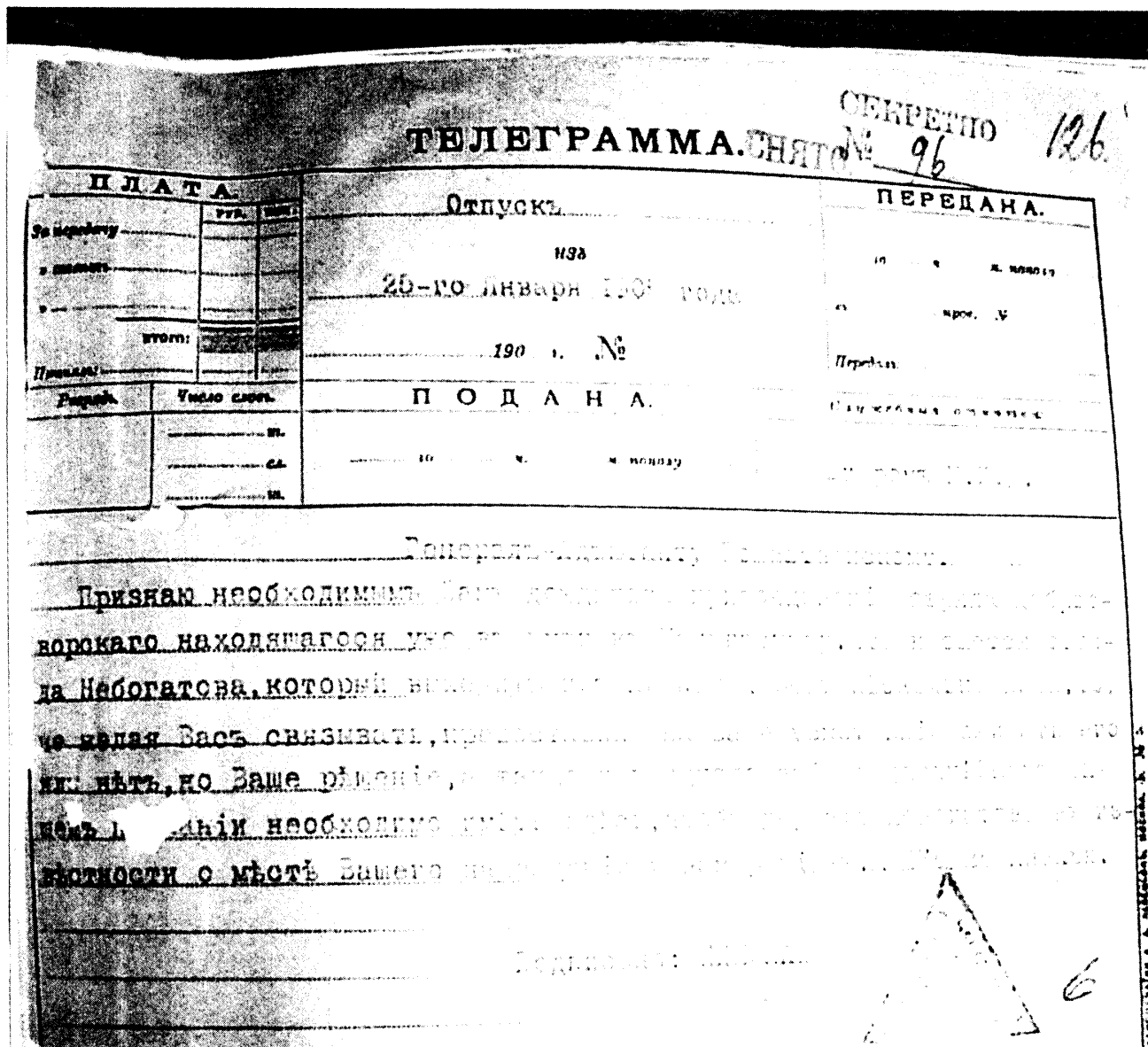


図3-4：電報2（ペテルブルグ発信ノシベ着信）皇帝の親電

1905年1月25日（西暦2月7日）

皇帝ニコライ II 世発

ロジェストウェンスキー侍従武官長宛

【ドブロツウオルスキーノ枝隊ハ、ステニマダガスカルニ向ケテ航行中ナリ故ニ貴下ハ同艦隊ノ到着ヲ待ツベキモノト認ム。ネボガトフ艦隊（注：1月2日参照）ハ、不日リバウヲ出港セン。シカシコノ艦隊ヲマダガスカルデ待ツカ否カハ貴下ノ裁量ニ委ネル。タダシ同艦隊トノ正確ナ合流予定地点ヲネボガトフニ伝エヨ。NO.476 ニコライ II 世】（ロシア海軍中央公文書館所蔵）

ノシベの憂愁

熱帯の強烈な陽光の下で日射病に倒れる者が続出した。長期の停泊で新鮮な野菜が不足した。皮膚病が蔓延した。近くに郵便局がないので、本国の事情も極東での戦況も、それに家族の消息も不明である。あきらめて釣糸を垂れる者もいる。

ロ司令長官は、将兵の士気を高揚させるべく日夜訓練と作業を課した。ささやかな慰安を求めて演芸大会も開かれた。しかし効果は上がらない。

艦隊将兵の健康状態は日に日に悪化する。やがて病院船「アリョール」で病死者がでる。病死したその機関兵を水葬にする儀式での出来事として、

[・・・艦隊ノ總艦船ニ於テハ將校下士卒ヲ上甲板ニ整列セシメタルニ拘ハラス獨リ同船(注:「アリョール」)ニ於テハ本職(注:ロ司令長官)ノ面前ヲモ顧ミス種々服装ヲナセル群衆ヲ甲板上ニ徘徊セシメ柩ヲ安置セル甲板面ニハ汚物散乱シ『聖ナル神ヨ』ノ誦讀中ニ當リ汚水槽ヲ持ち出シ僧官ニシテ袈裟ヲ纏フ者一人モ無カリシ・・・]
[司令長官命令第65号]。

そして、その死者の数が日毎に増加してゆく。

昼間から酒を呑み賭博にふける乗組員も少なくなかった。

[二等巡洋艦「ウラル」乗組機関少尉ザイランチコフスキー 右ハ2月6日制服ヲ着ケ上陸ノ末飲酒酩酊事ヲ省セサルニ至リ且ツ同様ニ酩酊セル病院船「アリョール」ノ水兵等ト格闘シ面部ニ負傷スルノ失態ヲ演セリ・・・] [同第62号]

首都ペテルブルグでの暴動(1月19日“血の日曜日”事件)のニュースを通信士が傍受する。運送船マライヤで反乱が起る。

無線機の保守・修理を担当してきたテレフンケン社(注:この時点ではシーメンス社の無線部門。翌1906年に独立してテレフンケン社設立)の技師が、士気の低下と秩序の崩壊にあきれて艦を降り帰国した。^[4]

2月11日 艦隊ノシベ在泊中

ロ司令長官は、海軍省から次の情報を接受した。

〔澎湖島ノ周圍ニ四百個ノ水雷ヲ沈置シア

リ日本ハ臺灣ニ於ケル日本軍隊ニ勤務セシムル爲廈門ニ於テ支那人ヲ募集ス馬拉加附近ニ瓜生少將ノ率キル日本軍艦五隻在リ〕

〔日本ハ旅順港ニ防備ヲ加ヘテ海軍ノ根據地ト爲ス心算無シ目下佐世保及横須賀ノ二港ニ在泊スル軍艦ハ戦艦四隻、一等巡洋艦八隻、二等巡洋艦三隻ニシテ尚各地ノ軍港ニ散在スル驅逐艦ハ二十隻水雷艇ハ三十隻ナリ全艦隊ハ遠カラス佐世保ニ集合スヘシ艦隊ハ戦闘準備成ルモ其根據地ヲ遠ク離レテ戦闘スルコトヲ避クルナラン然レトモ小艦及驅逐艦ハ攻撃ノ爲遠出動センヤモ知レス臺灣海峡ノ右岸ニハ海軍電信所ヲ設ケ六箇所ノ望樓ヲ設置シテ沿岸防禦ニ充テラレタル第二流ノ軍艦ト協力シテ其任務ヲ遂行シアリ〕

2月14日 艦隊ノシベ在泊中/ドブロウオルスキー枝隊と洋上で会合

コモロ諸島の西方からノシベに接近中のドブロウオルスキー枝隊の巡洋艦「オレグ」は午前8時、艦隊旗艦「クニャージ・スウォーロフ」から次の無線電信を受信した。

【貴隊ハ午前十一時迄ニ北緯十三度東經四十七度五十分ノ集合點ヘ來ルヘシ】

ド枝隊は11時に15隻の第二太平洋艦隊を発見、正午にロ司令長官の発する信号にしたがって合流し、午後4時にノシベ湾に投錨した。

この日、ロ司令長官は艦隊の無線設備について令達を発した。曰く、

①運送船「コレヤ」及「キタイ」ニハ空中線ノ高度低キ「マルコニ」式無線電信ヲ設備シ自餘ノ艦船ニハ驅逐艦ヲ除ク外皆空中線ノ高度高キ「スリヤビ・アルコ」式無線電信ヲ設備セリ

②運送船「ウラル」ノ無線電信モ亦「スリヤビ・アルコ」式ニシテ五百哩以上ニ達スル能力ヲ有ス

③軍艦ノ無線電信ハ水雷士官及電気技師ヲシテ管掌セシメタル所ナルカ艦隊中六箇月間ノ航海ニ於テ故障皆無ナリシハ猶運送船「コレヤ」ノミニシテ其他ハ全部屢々故障ヲ起生セリ

④「コレヤ」ノ電信ハ他ノ艦船ヨリモ常ニ早ク遠距離ノ電信ヲ接受シ一日同艦ハ九十哩ノ距離ヨリスル電信ヲ接受セシモ他ノ艦船ニ於テハ六十五哩餘ノ距離ヨリスル電

信スラ接受スルヲ得サリキ

⑤尚本日（2月14日）午前六時三十分「コレヤ」ノ電信ハ運送船「ウラル」ト「オレーグ」間ノ交信ヲ受信セリ蓋シ兩船ハ昨日ヨリ交信シアルモ互ニ了解セス而モ兩艦ノ間ニハ陸地モ又じ一本ノ檣モ之ヲ遮ルモノナキニ拘ラス接受スルコト能ハサリシニ「コレヤ」ハ山ヲ越へ七十哩ヲ距テ眞先ニ「オレーグ」ノ電信ヲ接受ススク「コレヤ」ノ電信機ノ良好ナルハ「スリヤビ・アルコ」式ノ「マルコニ」式ニ勝ル所以ナリトスルモノアルモ一方「マルコニ」式ヲ裝備シタル運送船「キタイ」ノ電信ハ何等不具合ナル所ナキニ徹スレハ必スシモ機械ノ優劣ノミニ歸スル能ハサルナリ、實ニ「コレヤ」電信機ノ整調ハ同船指揮官ノ配慮周到ニシテ又斯術ニ通曉スル一等水雷兵曹「アレクサンドル・スミルノフ」ノ技能卓絶ナルニ職由スル所多キヲ以テ本職ハ「コレヤ」指揮官及機關長ニ向ヒ特ニ満足ノ意ヲ表シ一等水兵曹「アレクサンドル・スミルノフ」ニ對シ艦隊司令部ヨリ五十留（注：ルーブル）ノ賞ヲ贈ラシム]

無線電信の技量を表彰されたのは、世界の海軍史上これが最初で最後であろう。ともあれデ・コヒーラーを採用していたマルコーニ式があまり調整を必要としなかったのに対して、「スラビ・アルコ」式は、ポポフ発案の検波器の調整に熟練を要した。調整が良ければ受信感度が上がるが、悪ければ感度が著しく低下した。

2月15日 艦隊ノシベ在泊中ノ第三太平洋艦隊リバウ出航

ロ司令長官が、艦隊にとって無用の長物あるいは足手まといと思う第三艦隊を、ネボガトフ少将が率いて、いよいよ本国を出発した。

ネボガトフ艦隊出航の知らせを受けたロ司令長官は、健康を害して寝込んだ。その軍艦の大部分は、第二太平洋艦隊編成に際して司令長官が排除した老朽艦だった。

2月16日 艦隊ノシベ在泊中

第三太平洋艦隊を知ったロ司令長官は、またもや海軍省に自身の戦略構想を長文電報で発信した。すなわち、

「『ネボガートフ』枝隊ノ諸艦カ豫期ノ如ク極東ニ達シ直ニ戦闘ニ参加シ得ル程度ニ修理善ク完成シアリトシ而モ其來著ヲ當地

ニ待タスシテ出發セハ其罪全ク本職ノ無謀ニ歸スヘキモ果シテ其修理ハ有望ニ爲サレリヤ疑無キヲ得ス三箇月ノ後ニ至リ「ネボガートフ」枝隊ノ到着スルヲ思フトキ機械及汽罐ノ不完全ナルモノ多カラント推測セラル此際一般ノ不平ハ本職ノ「マダガスカ」滞留ニ歸スルニ至ルヘシ本職ハ既ニ第一艦隊ノ空シク敗滅シタルヲ以テ「ネボガートフ」枝隊ヲ缺クトモ多少ノ損害ヲ賭シ艦隊ヲ率キ浦鹽斯徳ニ到達シ同軍港ヲ根據地ト爲シ北ニ於テ行動シ得ヘキ胸算ヲ有ス而シテ浦鹽斯徳ニ突破センニハ敢テ東航ノ途中ニ於テ「ネボガートフ」少将ノ枝隊トノ合同ヲ念頭ニ置カス只迅速ニ戰域ニ達スルコト必要ナリ]

とした上で、ネボガトフ枝隊の修理方法に重ねて言及しながら、前進の許可を重ねて次のように求めた。

「要ハ『ネボガートフ』枝隊ノ修理ノ完成如何ニアルモ元來堅強ノ材料ハ常習トシテ露國ノ工場ニ於テハ製作シ得サル所ニシテ現在第二艦隊ノ新艦ノ如キ用材施工ノ不良ニ苦シメラルルコト屢々ナリ然レトモ海軍省ガ同隊ノ修理ニ就キ特別ニ優越セルコトヲ確信セラルニ於テハ本職ニ對シ其來著ヲ待ツヘキ命令ヲ下サルヘシ若シ從來ノ規定通りノ修理ニ止ラハ本職ニ艦隊ヲ率キテ直ニ前進スルコトヲ許サルヘシ]

2月18日 第三太平洋艦隊バルト海航行中

この日、第三太平洋艦隊の巡洋艦「ウラジミール・モノマフ」は、ネボガトフ司令官の命令で水雷士官がシーメンス商会の技師2人の指導のもとに無線設備の試験を実施するため、他の艦船から100マイル離れて航行した。

2月21日 艦隊ノシベ在泊中

ロ司令長官は、海軍省から次の情報を接受した。

「三箇ノ新師團ハ朝鮮ヘ輸送中ナリ新兵ノ教練ハ將ニ終ラントスル所ニシテ四月ノ初マテニ約九萬人ヲ得ントス函館ノ艦隊ハ装甲巡洋艦三隻、驅逐艦隊四箇及三等補助巡洋艦三隻ヨリ成ル]

2月24日 艦隊ノシベ在泊中

ロ司令長官は、海軍省から次の情報を接受した。

「日本ハ浦鹽斯徳ヲ遮斷セントスル目的

ヲ以テ攻城砲ヲ有スル部隊ヲ上陸セント計畫シ又津輕海峡ニ機雷ヲ沈置スル豫定ナリ波爾的艦隊ノ到來前ニ於ケル日本艦隊ノ所在點ハ我艦隊ノ浦鹽斯徳ニ向ハントスル航路ノ選定ニ從ヒ決定スヘシ]

2月28日 艦隊ノシベ在泊中／第三艦隊ビスケー湾で荒天に遭遇

ロ司令長官は、ネボガトフ枝隊に期待するところは何かない。旅順艦隊無き今、一刻も早い前進こそ急務と考えていた。

司令長官は進言した。

〔日本に對スル我海軍ノ行動ヲシテ奏功セシメント欲セハ浦鹽斯徳ハ太平洋沿岸ニ於ケル唯一ノ我海軍根據地ナルヲ以テ至急同地ニ相當ノ設備ヲ施シ必要ノ物件ヲ集メ置カレタシ〕

2月7日付電報に対する海軍省からの返電があった。

〔艦隊司令長官ニ課セラレタル任務ハ僅ニ麾下ノ數艦ヲ浦鹽斯徳へ奔入セシメハ足レリト爲スヘキニアラスシテ日本海ヲ領有セントスルニアリ而シテ現下「マダガスカル」ニ集合スル艦隊ノ勢力ニテハ此任務ニ對シ不充分ナリト認メラルルニ因リ「ドブロウオルスキー」枝隊ノ外ニ四月上旬ニ印度洋ニ至ラントスル「ネボガトフ」枝隊ヲ艦隊ニ合同セシメハ艦隊ノ本任務遂行ヲ容易ニスヘシ〕

同日、ビスケー湾での荒天から脱した第三艦隊ネボガトフ司令官は、タンジールに先行させた運送船「クロニヤ」との間で無線電信により、命令書で指示した運炭船の運航計画を確認した。

2月末 艦隊ノシベ在泊中

1月19日の出航延期以来、海軍省とハンブルグ・アメリカ会社との間で艦隊の石炭輸送に関する交渉が延々と続けられていた。

その結果、ようやく合意が成立した。すなわち、

- ① 従来ロシア国旗を掲げていたドイツ運炭船にドイツ国旗を掲げる
- ② 日本の軍艦に出会った際はただちに降伏する
- ③ 北緯11度以北、東経110度以東には進まない（注：サイゴンより北上はしない）
- ④ 問題がなければ中立国の港内で石炭を艦隊に移載するなどを条件として、運炭船が艦隊

と同航を続けるとするものである。

3月2日 艦隊ノシベ在泊中

前年11月からロンドンで開催されていたドッガーバンク事件に関する国際査問会は、以下の事項を認定して、2月半ばにその任務を終えた。

- ① ドッガーバンクで操業中の漁船の中に、日本の水雷艇も他国の水雷艇も居なかった。
- ② イギリスは日本のために北海での行動に必要な水雷艇を建造していない。
- ③ デンマークの警察官とロシアから派遣された諜報員は、各方面から得た情報をに基づき、ロジェストウェンスキー中将に、日本の水雷艇が北海に居ることを疑わせる情報を送った。査問会のこの結論から海軍大臣は、同日付でロ司令長官に次の電報を発信した。
〔中將及艦隊乗員ノ行爲ハ査問會ニ於テ軍事任務ノ遂行ニ關シ又人道ノ主義ニ耐シ此難スル所無キ正當ノモノト認メラレ而シテ水雷艇ノ有無ニ就テハ之ヲ不明ニ附シ結論ニ達セス〕

ロ司令長官は5カ月ぶりで、いまわしいドッガーバンク事件から解放された。

3月4日 艦隊ノシベ在泊中

艦隊参謀は、軍令部長から次の情報を接受した。

〔日本軍艦ノ修理後ニ於ケル速力ハ戰艦約十七節、装甲巡洋艦約十八節、二等巡洋艦約十八節、三等巡洋艦約十六節、驅逐艦約二十八節ナリ、五隻ノ補助巡洋艦武装シ各艦ハ六吋砲六門及小口径砲數門ヲ備フ、黒龍江ニ使用スル砲艦數隻ヲ長崎ト神戸トニ於テ建造ス、潜水艇ノ總數ハ十隻ニシテ内三隻ハ澎湖島ニ在リ〕

この情報や2月11日にロ司令長官に通謀された情報はロシア側の諜報員、いわゆる“露探”が日本海軍内部に潜入していることを示唆する。

あるいは、横浜に活動の拠点を置いたジャーナリストのフランス人バレー^[5]などが、日本人の協力者を得て収集した情報であろうか。

3月9日 艦隊ノシベ在泊中

石炭補給問題は一応解決した。しかしハンブルグ・アメリカ汽船会社は、各地の代表者などに艦隊の航程に沿った港湾や海峡の名称を、暗号を用いずに打電した。ロ司令長官は、このことを非常に憂慮した。

3月12日 艦隊ノシベ在泊中

この日、艦隊の将兵はクロパトキン將軍率いる陸軍が奉天から敗退したことを知った。

3月13日 第三艦隊アレキサンドリア着
ネボガトフ司令官は海軍省に報告した。

〔枝隊ハ總テ完全ニシテ當地ニ到着ス機械ノ運轉モ亦甚良好ナリ汽罐ノ洗滌及掃除ニ七日間ノ碇泊ヲ要ス運河通行ニ對スル司令ヲ請フ〕

2.6 ノシベ～インド洋～カムラン湾

旅順が日本軍の手に落ちてからすでに3月余、その上クロパトキン率いるロシア陸軍までも満州の奉天で敗退したことを知ったロ司令長官は、もはや一刻の猶予もできないものと決意した。

3月16日 艦隊ノシベ湾を抜錨

出航を前にしてロ司令長官は海軍省に宛て次の寄港地を示さず発信した。

〔「ノッシベ」湾ヲ出動ス〕

艦隊はインド洋縦断の航海に上った。

3月21日 第三艦隊スタ出港、強風のため難航。

3月23日 艦隊インド洋縦断中

インド洋縦断中の旗艦「クニャージ・スウォーロフ」と戦艦「シソイ・ウェリーキー」との間に次の無線電気が往復した。^[3]

【副長無線電信機ニ就クヘシ】(旗艦発)

【副長無線電信機ニ就キタリ】(「シソイ」発)

【正午ヨリノ當直將校誰レナルヤ直ク知ラセ同人ハ二回モ反對ノ針路ヲ執ラントセリ當直ヲ去ラシメ健康ヲ診断セシメヨ 司令長官】(旗艦発)

【當直將校ハマリーチュキン大尉ナリ艦長モ亦始終艦橋ニ在リ】(「シソイ」発)

3月24日 第三艦隊ポートサイド入港

当地でネボガトフ司令官は海軍省から、ロ司令長官率いる第二艦隊が3月16日にノシベ湾を出動した旨の電報を接受した。

3月25日 第三艦隊スエズ運河通過

この日、第三艦隊は黒海のオデッサから来航した病院船「カストロマ」を加えて、スエズ運河の通行を開始した。

3月30日 艦隊赤道通過

4月2日 第三艦隊、紅海を南下してジブチ着

4月4日 艦隊インド洋縦断中

ロ司令長官は隷下の艦隊に無線電信で次のよ

うに命令した。

【航行序列ヲ以テ航進中夜間水雷襲撃ヲ撃退スルニ際シテハ見方打ヲ避クル爲充分ニ静肅ヲ保ツヘシ、艦隊ノ兩翼ヲ護衛スル巡洋艦ハ縦陣中ニ於ケル各艦ノ間ニ向ツテ大俯角ヲ以テ射撃シ得ル場合ニアラサレハ縦陣列内ニ對シテ射撃ヲ行フヘカラス、何レノ艦モ爆發セサル限り列ヲ脱スヘカラス之後續艦ニ混雜ヲ起サシメ敵ニ襲撃ノ便ヲ與フルヲ以テナリ、特ニ運送船ハ側方ヘ避退スヘカラス、損害ヲ被リ艦隊ノ速力ヲ保ツコト能ハサル艦ニ限り列外ヘ出ツルヘシ】

同日、ロ司令長官は信号命令で艦隊の到着地点をサイゴンの北方200マイルのカムラン湾と指定。また日没に際して「水雷襲撃ニ注意セヨ」との信号を揚げた。

一昼夜の航程150マイル、平均速力6.3ノットであった。

4月7日 艦隊マラッカ海峡通過中

午後10時5分、巡洋艦「アルマーズ」より旗艦宛て次の緊急信。

【艦長及當直將校ハ本艦艦尾ノ左舷ニ當リ一汽船ト高速力ニテ駛行スル驅逐艦隊トヲ認ム驅逐艦隊ハ其影ヲ失ヒ今ハ汽船ノミヲ視ル】(「アルマーズ」発)^[3]

旗艦から巡洋艦「ドミトリー・ドンスコイ」に向け発光信号で、同艦もそれらの艦艇を認めたかを問い合わせた。「ドンスコイ」から返電があった。

【當直將校及航海長ハ二分間本艦ノ後方ニ反航スルー汽船ヲ認メ又鷗ラシキー群ノ物體ヲ認メタルモ此物體ハ須臾ニシテ消滅セリ】(「ドンスコイ」発)^[3]

この時戦艦「アリヨール」は問題の汽船に近かったのをこれを見ることができた。しかし、駆逐艦は一隻も居なかった。ただ、汽船が起こした波浪の反映が、あるいは疑わしい艦船と誤認されたのか・・・？

海豚の群れが日本の潜水艇にも見えた、マラッカ海峡のミステリーであった。

4月8日 未明マラッカ沖通過 午後2時シンガポール沖通過

海岸でその堂々たる艦隊の偉容を遠望した居留邦人たちは日本艦隊が、はたしてこのロシア艦隊に対抗できるのかと、危惧したという。

駐シンガポールロシア領事ルダーフスキーが蒸気船で艦隊を訪問し、海軍省からの情報として第三艦隊の動向と日本艦隊の動静を報告した。

いよいよ南支那海に入った午後8時5分、ロ司令長官は戦艦「オスラービヤ」と巡洋艦「アルマーズ」の司令官に宛て次の電信を発した。^[3]

【日本艦隊ハボルネオ島ノラブアンニ止マリ其驅逐艦及巡洋艦ハ爰ヨリ最も近キナチユナ島ニアリ敵ハ夕刻我運動ヲ悟リ得タリ】

4月9日 艦隊南支那海を北上中

夕刻、旗艦「クニャージ・スウォーロフ」から無線電信で命令。

【巡洋艦「オレグ」及「アウロラ」ノ二隻ハ巡洋艦戦隊ヨリ第二戦艦戦隊ニ移リ戦闘ノ場合ニ第二戦艦戦隊ノ後尾ニ續行セヨ】^[3]

続いて「アルマーズ」宛て次の指令。

【敵ノ主力ト衝突ノ場合ニハ「アウローラ」及「オレグ」ヲ主力戦隊（戦艦）ニ合セシムヘシ貴官（注：第2巡洋艦隊司令官シェーン大佐）ハ「アルマーズ」「ドニエープル」「リオン」「ドンスコイ」及第二驅逐隊ヲ率ヒ運送船隊ノ護衛ニ當リ主力戦隊ト相失セサル様成ルヘク艦隊ト同一ノ針路ヲ執リ随行スヘシ】^[3]

午後10時頃、「オスラービヤ」発「オレグ」中継の新聞情報を「アリヨール」が次のようにセマホールで接受した。^[3]

{日本ノ全艦隊ハボルネオ島ノ北岸ニアリ五隻ノ潜水艇マラッカ燈臺ノ附近ニテ我レヲ迎撃セントノ企アリシ、ネボガトフハ4月4日マデヂブーチニ在リ我陸軍ハ鐵嶺（注：満州の奉天北方、最後の拠点）ノ以内ニ退却シ、リネウキチハ總司令官トナリクロバトキンハ第一軍ヲ指揮ス（注：敗北による降格）・・・}

日本海軍の「千歳」「笠置」など南遣支隊の哨戒活動は3月初旬から中旬までには終了していた。新聞報道はこれを伝えたものか、あるいは軍令部が故意に流した虚報によるものか。いずれにせよ“潜水艇”は作戦行動に参加していない。

4月10日 艦隊アナンバス諸島通過 洋上の幕僚会議

駐シンガポール領事が4月8日にもたらした情報を基に、ネボガトフ少将率いる第三太平洋艦

隊との合同を前提として今後の艦隊行動を決定すべく、ロ司令長官はコロ参謀長をはじめとする参謀を集めた幕僚会議を招集した。

席上、古参の参謀セミーノフ中佐は、さすがに長途の航海途上にある将兵の心理を把握して次のように発言した。

〔幸ニ馬拉加海峽モ新嘉坡海峽モ無事ニ通過シタレハ乗員ハ其疲勞ヲ忘レ士氣大ニ振ルヘキヲ以テ此好機ヲ利用シテ北進セサルヘカラス而モ此旺盛ナル士氣ハ持續スルモノニアラス一時ノ元氣ハ到底身體ノ困衰疲勞ニ打勝ツコト能ハス寧ロ之カ反動トシテ銷沈スルコトノ更ニ甚シキヲ見シ故ニ艦隊ハ此際飽クマテ前進セサルヘカラス〕

これに対して最若手参謀のスウェントルジェッキー大尉が憶せずに見解を披瀝した。

〔本艦隊ハ浦鹽斯徳ニ至ル途中ニ於テ既ニ本艦隊ヨリ強大ナリシ第一太平洋艦隊ヲ撃滅シテ戦勝ノ威名ヲ躍シツツアル日本艦隊トノ決戦ヲ逃ルルコト難カルヘシ然ルニ本艦隊ハ長途ノ航海ニ疲レ疑惧ノ觀念ニ脅サレ加之未嘗テ其能ク命中シ破壊作用ノ猛烈ナル（注：下瀬火薬を充填した）敵弾ヲ試ミタルコト無キ軍艦ヲ以テ臨ムコトナレハ全滅ニ至ラストモ其蒙ルヘキ損害必非常ナラン而シテ好都合ナル天候ニ乗シ敵ノ眼ヲ掠メテ萬一ノ僥倖ヲ期スルハ到底望ムヘキモノニアラス現戦争ニ於テノ幸福ハ牢固トシテ離レサルヘシ〕

この記録は日露戦争の後で纏められたものを日本側で翻訳しているから、最若手の参謀が本当にこの通り発言したのかどうかは不明である。が、それにしても彼は勝利が望めないことを冷静に判断していた。その上でスウェントルジェッキー大尉は発言を続けた。

〔假リニ一歩ヲ譲リテ本艦隊ノ殘艦カ浦鹽斯徳ニ捷シタリトスルモ之ヲ以テ直ニ本艦隊ノ任務即海上權獲得ノ目的ヲ達シ得ヘシト爲スハ早計ナリ各艦ハ大渡航ヲ遂ケシ後トテ孰レモ唯一ノ船渠ニ入りテ修理ヲ加フヘキ必要アラン尚又西比利亞鐵道カ辛フシテ陸軍ノ所要ヲ辨シ居ルニ過キサルコトヲ考ヘナハ彈藥其他ノ軍需品ノ供給ヲ受クルコトノ困難ニシテ或ハ不可能ナルヲ推察スヘク又舊式ノ軍艦ト運送船ヨリ成ル「ネボガトフ」枝隊ノ今後ニ於ケル不明ナル

運命ニ想到スルトキ今後如何ナル處置ヲ執ルヘキヤハ焦眉ノ大問題タルヘシ]

と、この会議の主題を確認した上で、

〔此大問題ヲ解決セント欲セハ我カ艦隊ハ宜シク總テノ艦船ヲ集合シ亡失スル所無ク隊伍ヲ亂サス整々堂々ト南支那海ニ現出スヘシ然ルトキハ露國ノ威力ヲ發揮スルコト無論ナレハ此効果ヲ利用シテ名譽アル媾和ヲ只管取急カサルヘカラス最早海上ノ行動ヲ以テ外ニ成功ヲ求メントスルハ期待スヘカラサルモノニシテ又妄想スヘカラサルモノナリ然レトモ意見ノ採否ハ我等ノ關スル所ニアラサルヲ遺憾トスルノミ〕

と、述べた。ここまで来たらヤルしかない。勝利が望めないならば最善を尽くし堂々と戦った上で“名譽アル媾和”を実現すべしとの、勇氣ある進言である。

この幕僚会議の席上、コロン参謀長からもロ司令長官からも何の発言もなかった。しかし、このスウェントルジェッキー参謀が具申した意見は、この後のロ司令長官の作戦行動に影響を与えていることがうかがえる。

あるいはこの最若手の参謀がロ司令長官の内心を代弁したのかも知れない。

4月11日 艦隊カムラン湾の北方

正午過ぎに病院船「アリヨール」はロ司令長官の命令で、食糧の調達、患者の入院、電報発信の目的で艦隊を離れサイゴンに向かった。

この日、ロ司令長官は海軍省に宛てた次の内容の長文電報を「アリヨール」に託して、サイゴン電信局から発信させた。

〔本職ハ四月十一日「カムラング」ノ北方三百哩ノ地點ニ達ス幸ニシテ我艦隊ヲ追尾スル日本艦隊ヨリ攻撃ヲ受クルコト無ク又「カムラング」灣内ヘノ寄港ヲ許サレシハ此地ニ停留シテ命令ヲ待チ戰地ノ形勢特ニ浦鹽斯徳ノ狀況ニ應シテ今後執ルヘキ行動ニ關スル勅令ヲ仰カント欲ス若又艦隊ヲ前進セシムルニ決セハ至急發令サレタシ、不可解ナル無線電信ヲ斷ヘス感應スル所ヨリスレハ日本艦隊ハ近傍ニ在ルカ如シ浦鹽斯徳ニ於テ今尚艦隊ノ到來ヲ必要トシ且同地ニ於テ三萬餘人ニ對スル食物ヲ缺ク憂無ク又海軍用ノ彈藥殘存セハ「ネボガートフ」少將枝隊（注：増援の第三太平洋艦隊）ノ來著ヲ待タス直ニ出動セン一週間タリトモ

徒ニ時日ヲ遷延セハ復償フヘカラサル不利ヲ招カン而シテ浦鹽斯徳ニ愈々發向スヘキ命令ヲ下スニ決セハ海軍省ハ高級ノ職員ニスラ之ヲ秘密ニシテ尚我海外派遣員等ヲシテ偽電ヲ發セシメ艦隊ハ當所ニ於テ「ネボガートフ」枝隊及今春出發スル枝隊トノ合同ヲ待チアルカ如ク宣傳スヘシ又艦隊ニシテ浦鹽斯徳ニ到達シタリトテ事既ニ晩シトナサハ根據地ノ無キ所ニ艦隊ヲ長ク滞留セシムルコト能ハサルヲ以テ露國ニ引返スヲ必要トス〕

この電報は4月14日ペテルブルグに到達した。海軍省発は即日ロ司令長官宛に返電した。しかし返電はすぐには入手できない。艦船を港まで往復させなければならぬ。そしてその返電如何で日本近海に進航するにせよあるいは本国に戻るにせよ、補給は必要である。ロ司令長官は併せて、電報と書信をサイゴン港在泊中のロシア巡洋艦「ディアナ」艦長リーウェンに送り、

〔將校と兵員の糧食および石炭を調達してカムラン湾へ急送するとともに、汽船を雇用備入れサイゴンーカムラン湾間の交通の安全を確保]

するよう命令した。

艦隊はイギリス軍艦 2隻と出会った後は他の艦影を見ることはなかった。イギリス軍艦相互間に頻繁に電信が交わされていた。

4月12日 サイゴン沖北上中

黎明を待って載炭を始めた。しかし、サイゴンから送った電報の返信を待つロ司令長官の心は平静ではなかった。情報が無いまま決断を下さなければならぬからである。

〔此日朝來「ロジェストウェンスキー」中將ハ何ト無ク心氣落チテ著カス怒リ易ク無言勝ニシテ自己ノ室内ニハ居ルコト少ク或ハ前艦橋ニ出テ或ハ後部艦橋ニ來リ又後檣樓ニ登リテ運動ヲナシタリ・・・〕

午後3時に不可解な電信を受信した。その信号を発する軍艦は共に接近して来るように感じられたので、艦隊は載炭を中止、進路をカムラン湾の入口であるパダラン灯台に向けた。無線電信を交換していた軍艦は遠ざかった。

2.7 カムラン湾在泊

4月13日 艦隊カムラン湾到着

4月14日 カムラン湾停泊中

ロ司令長官の命令により、すでに 3月23日に3万トンの石炭を搭載してジェゴアレツを出港したハンブルグ・アメリカ汽船会社の汽船4隻が入港していた。4隻とも主檣にロシア国旗を、前檣にフランス国旗を、斜桁にドイツ国旗を掲げていた。

正午頃、巡洋艦「ディナ」艦長リーウェンがサイゴンから差向けたドイツ汽船会社の「ダグマル」が、ロ司令長官が4月11日に海軍省に宛てた電報の返信を届けてきた。曰く

〔浦鹽斯徳ノ陸正面ハ開放シアリ又同地ニハ貯蔵品アリ「ネボガートフ」枝隊ヲ待タス前進スヘシ〕

この命令を得て、ロ司令長官は最終的にウラジオストクをめざし、日本近海への進航を決意した。

4月16日 カムラン湾停泊中

フェリケルザム少将が脳溢血で倒れた。元もと病弱なフ少将の再起が危ぶまれた。

4月17日 カムラン湾停泊中

〔本日漸ク本艦士官以上ニ初メテ電報(注：本国宛て私用電報)ヲ發スルノ機ヲ得タリ是レ蓋シ陸上ニ於テ單一ノ電信局存在シ・・・本艦ヨリ發セルモノ、ミニテソノ料金九八〇法ニ上レリ土人ノ言ニ依レハ二、三ヶ月前日本巡洋艦二隻驅逐艦ヲ伴ヒ入港シ生獸肉ヲ注文セシモ佛國官憲ハ之ニ出港ヲ申出テタリ而シテ日本艦隊ノ詭ヘタル家畜ハ今ヤ之ヲ我艦隊ニ販賣スルコト、セリ〕^[3]

4月19日 カムラン湾停泊中

この日エンクェスト少将はその将旗を「オレグ」に移した。

ロ司令長官は命令を発した。曰く

〔・・・手旗信号ハ永久ニ存スル唯一ノ方法ナルモ此法タルヤ甚タ迂遠ノモノナリ依テ戦闘中運動ノ信號ニハ最も輕便ノ方法ヲ執ラサルヘカラス是カ爲メ各艦ハ長五呎巾四呎ノ黑板若クハ鐵葉板二枚ヲ用意シ中一枚ハ前橋ニ於テ前續艦ニ向ヒ他ハ後橋ニ於テ後續艦ニ向ヒ便宜ノ位置ニ張り附ケ又白堊ト海綿トヲ其附近ニ備ヘ付クヘシ黑板

面ニハ最も簡單ナル運動信號ヲ記スヘシ・・・〕

〔司令長官命令第192號〕

無線電信の信頼性に不安を抱く司令長官は、ついに画期的な通信手段としての“黑板”を考案した。それにしても長官の脳裏には、縦陣形で日本艦隊を突破しウラジオストクに逃げ込む艦隊の構図が描かれていたのであろう。

4月20日 カムラン湾停泊中

ロ司令長官はカムラン湾に一週間停泊した後、海軍省に次のように打電した。

〔本職ハ「カムラン」湾ニ向フ途中石炭ノ用意ハ柴棍ニ於テ爲シアラント思料シ即刻浦鹽斯徳ニ向ツテ航進スルノ必要ヲ柴棍經由ニテ電報ヲ發シ又一月以來幾度ト無ク反復シテ要請シ置キタルニ拘ラス柴棍ニ於テ何等ノ用意ヲ爲シアラサルヲ以テ今ハ唯々曩ニ遺棄シタル石炭ニシテ幸ニ盜禍ヲ免レアラハ我空荷ノ運送船ヲ以テ之ヲ運搬セシムル外何等ノ手段ナク爲ニ悉ク敵ノ不意ニ乗スル便宜ヲ失ヒ前進ノ澁滯又無定期ナラントス〕

艦隊ニ於ケル無線電信ノ状態

日本近海への進航を決意したものの、ロ司令長官の胸中には、日本艦隊との決戦を前にして一抹の不安があった。ノシベ以来、長官は艦隊の無線電信の性能にきわめて不満であった。そして今回、次のように告示した。

〔艦隊ニ無線電信ヲ採用スルニ就イテハ八箇月間非常ニ辛苦セシカ其結果ヲ見レハ下ニ述フル所ノ如シ昨四月六日(十九日)戰艦戰隊ヨリ海上ニ於テ運送船隊指揮官ニ臨時命令ヲ傳フヘキ必要起リ旗艦「クニャージ・スウォロフ」ハ十五哩ヲ距ツル巡洋艦「アルマーズ」ニ向ヒ一時間餘ニ互リテ(一時間十五分)呼出ヲ掛ケシモ遂ニ應答セス因テ「スウォロフ」ハ泊地ニ殘レル旗艦「オレーグ」ヲ呼出サントセシモ之モ亦何等ノ應答ヲ得ズ本日ハ午後二時ヨリ艦隊ニ近付カントスル巡洋艦戰隊ノ「グバン」「テレク」及「ウラル」ト交信スル筈ニシテ「スウォロフ」ノ無線電信所ハ豫メ約束シタル電信符号ヲ接受セント大ニ努メタルモ器械不整調ニシテ僅ニ大氣ノ放電ニ類スル不正ノ記號ヲ應答セシノミ「スウォロフ」ノ無線電信所ニシテ尚且斯クノ如キハ慨嘆

ニ堪ヘサルモ尚艦隊中ニ於テ「グバン」ノ呼出ヲ感シ之ヲ「スウォロフ」ニ取次キシ者一艦モナキハ更ニ憂慮ニ堪ヘサルナリ本日モ亦「スウォロフ」ノ無線電信所ヨリ哨戒任務ニ就キタル（注：フランス）巡洋艦「リオン」ヲ呼出サント大ニ努メタルモ遂ニ徒勞ニ歸セリ云々]

ほぼ目視の距離内での、無線電信の不達にいらだつ司令長官の焦燥感が、手に取るように伝わってくる。察するに送信機の“栄光の電弧”は放電して電波が放射されてはいるものの、ポポフが開発した受信機内の炭素検波器（“・・・からの視点1”参照）の調整に熟練しない将兵が多く、受信できなかつたのであろう。

“黑板”の改良

試行の結果“黑板”にその都度文字を記入するのは非能率的であることが判明した。そこで「スウォーロフ」の艦長が“小銃標的ノ大キサヲ有スル黒地ノ帆布ニ白堊ヲ以テ豫メ文字ト數字トヲ記載シ”これを掲げる視覚通信の方法を提案して、採用された。

カムラン湾を追われる

司令長官は、石炭をはじめとする補給品の到着を、ただ待ちわびていたわけではなかつた。巡洋艦で港外を哨戒し、中立国の商船を臨検した。

臨検を受けた国ぐにの外務省から、フランス政府に“第二太平洋艦隊を長期間カムラン湾に停泊させるのは中立国条約違反である”との抗議がなされた。日本政府も艦隊を退去させるよう圧力をかけた。

4月22日 カムラン湾を抜錨、公海上に漂泊。

司令長官は、抜錨前に海軍省に宛て打電した。

〔約束ノ石炭ハ 4月22日マデー噸モ柴棍ニ於テ受ケス漢堡亞米利加會社ノ汽船其他ノ汽船モ搭載シ來ラス艦隊ハ佛國政府ノ要求ニ依リ其領海外ヘ退去スルノ止ムナキニ至レリ本職ハ公海ニ留リテ柴棍トノ交通ヲ保タントス艦隊ノ石炭ノ供給ニ就キ安心ヲ得サル限り一步モ目的地ニ向ヒ進ミ難シ去リトテ艦隊カ汽釀シツツ海上ニ久シク留リ居ラハ日々其消費スル所ノ石炭千噸ニ及フヲ以テ遂ニ進退ニ窮セン納炭契約ヲ結ヒタル者ニ對シ彼得堡^{ベテルブルグ}ヨリ切實ナル督促ヲ爲サレンコト焦眉ノ急務ナリ〕

司令長官の目前の敵は東郷ではなかつた。

4月24日 カムラン湾外の公海上

司令長官は海軍省から大要次のような電報を受け取った。

〔「ネボガートフ」少将ノ枝隊ハ5月2日新嘉坡^{シンガポール}ノ子午線上ニ當ル「リウ」島ニ達スヘキヲ以テ之ト合同スルマテ待居ルヘシ〕同時に接受したもう1通の電報に曰く、

〔佛國政府ハ日本ノ抗議ニ因リ艦隊ニ「カムラン」湾ヲ早速退去セシムルコトヲ要求スルコト切ナリ艦隊ニシテ果シテ佛國ノ領海ニアラハ退去スヘシ〕

司令長官は憤慨した。“本国政府はなぜこうまでフランスに弱腰なのか！”

2.8 ワン・フォン湾／クアベ湾在泊 第3 太平洋艦隊と合同

4月26日 艦隊ワン・フォン湾に投錨

この日午後3時頃、艦隊はカムラン湾の北約60マイルのワン・フォン湾（ホンコーへ湾）に到着した。ここでも24時間以内に退去を求められたがそのまま停泊を続けた。

現地住民が牛、鶏、鴨、バナナ、カボチャなどを売りにきた。釣り銭の中に、日本で偽造されたルーブルの小額紙幣が混じっていたという。

4月28日 ワン・フォン湾停泊中

ドイツの石炭輸送船がカムラン湾以北への同行を拒否しているの、艦隊はサイゴンで雇った貨物船に積み替えた石炭や食糧などをワン・フォン湾で受け取った。

この日、艦隊は内容不明の無線電信を受信した。あるいはネボガートフ艦隊が発したものと喜んだが、実はフランスの軍艦の交信によるものと判明した。

4月29日 ワン・フォン湾停泊中

この日、復活祭前夜祭。艦隊は課業を休み、艦内の清掃を行った。

司令長官は「司令長官命令第206号」で艦隊将兵に訓令した。

〔一箇月前ニ於テテスラ日本人ハ我艦隊ノ在泊スル當地及南方海峽ノ附近ニ巡洋艦及驅逐艦ヲ數隻配置セシ程ナレハ今日ニ至リテハ不意ナル夜中襲撃ヲ決行シ又ハ好機ニ乘シテ我艦隊ノ勢力ヲ減殺シ以テ主力ノ戦闘ニ便ニセントスル準備ハ一層完備シタルナラン〕

日本人ハ不意ノ攻撃ヲ決行スル時機トシテ我乗員カ最警戒ヲ怠リアリト想像セラレ得ヘキ時機ヲ選定スヘキヲ以テ大祭日ノ前夜タル今夜ノ如キハ彼等ノ最機會ト爲ス所ナラン故ニ艦隊ノ乗員ハ善ク此點ニ注意シ祈禱中及除齋式中ト雖當直員ノ外ニ分隊ハ半數ノ將校、探照燈ハ半數ノ掌水雷兵、四十七耗砲及七十五耗砲ハ半數ノ砲員、十二糎砲及六吋砲ハ全部ノ砲員又無線電信所附ニシテ經驗ヲ有スル信號兵ハ上甲板ニ残りテ各自其部署ヲ離ルヘカラス當直ノ巡洋艦、驅逐艦、艦載水雷艇ハ特別慎重ニ其任務ヲ遂行スヘシ]

この時点で日本海軍の艦船はこの海域には出動していない。それを知ってか知らずか、ロ司令長官は艦隊將兵の緊張を持続させる目的で、復活祭前夜祭にあえてこの命令を発したのだった。しかし司令長官の意図とは裏腹に戦艦「アリヨール」では艦の規律をゆるがす事件が起こっていた。当直士官マドザレフスキー大尉は記した。

『食事(晝食)ニ就ケ』ノ「パイプ」ヲ吹カシメタルトキ兵員ハ賄所ニ集リ配給ノ肉汁ヲ喰フヲ欲セス是ニ於テ艦長ハ夕食ニハ新材料ヲ以テ調理セシムヘキヲ令セリ然レトモ尚前部ニ集會シ大聲ヲ發シ掌水雷兵カルゾフノ禁錮ヲ解放スヘシナト叫フ同人ハ兵員ノ食事宜シカラストテ訴ヘタル者ナリ是ニ於テ本職及副長ハ解散セシメントシタルモ之ニ服從セス遂ニ艦長ノカルゾフ解放ノ令ニヨリ騒動ハ鎮靜セリ……』^[3]

4月30日 ワン・フォン湾停泊中

復活祭のこの日、艦隊はすべての課業を休み、満艦飾で祭日を祝った。

5月1日 ワン・フォン湾停泊中

艦隊はフランス駆逐艦「ジ・カ・ウェイ」の台風警報を接受した。

ロ司令長官は海軍省に宛て次の長文電報を発信した。

〔艦隊ハ「ネボガートフ」枝隊ト合同シテ結氷前ニ浦鹽斯徳ニ根據ヲ固メンニハ五十萬噸ノ石炭ヲ至急浦鹽斯徳ニ運搬シ置カサルヘカラス之レ朝鮮半島ヲ六回迂回スルニ足ル炭量ナリ而シテ此ノ石炭ハ濠洲及桑港ヨリ宗谷海峡を經テ浦鹽斯徳ヘ至急輸入スルヲ要ス

艦隊及「ネボガートフ」枝隊ノ有スル唯

一ノ石炭タル軍艦及補助巡洋艦ノ載炭量全部ヲ擧クルモ僅ニ四萬二千噸ヲ出サルヘシ然ルニ二千五百哩ヲ回航センニハ艦船ハ五萬噸ノ石炭ヲ要ス目下浦鹽斯徳ニ現在スル石炭ニテハ艦隊ハ一度朝鮮ヲ迂回シ得ルニ過キサルヘシ而シテ一度迂回セハ又柴棍ニ歸還セシヤモ知ルヘカラサルヲ以テ運送船ニ九萬六千噸ノ石炭ヲ積載セサルヘカラス故ニ「バタビヤ」、柴棍、上海、膠州ノ貯炭ヲ滅却セシメス別ニ浦鹽ニ石炭ヲ運搬セラレンコトヲ請フ]

石炭の輸入先から輸送経路にまで言及しないと気が済まないところに、ロ司令長官の性格が表れている。

5月2日 ワン・フォン湾を一時退去

艦隊はフランス政府から領海退去を要求された。ロ司令長官は憤懣やるかたないが、止むを得ずそれに従って、艦隊を一旦湾外に退出させた。

湾外に出た「スウォーロフ」は、フランスの巡洋艦「ギシャン」と行き合った。ロ司令長官は怒りを抑えながら、司令官ドジョンキール中将との間で儀礼電報を交換した。^[3]

【余ハ閣下ニ宛テタル電報(注：ロシア本国発)ヲ齎ラセリ之ヲ「アルマーズ」ニ交附セントス尚ホ閣下ニ對シ敬意ヲ表ス】(ド中将発)

【余ノ厚キ感謝ヲ納メラレンコトヲ祈ル】(ロ司令長官発)

また「スウォーロフ」と哨戒中のフランス巡洋艦「リオン」との間に次の電報が往復した。なお、以後この種の通信は『萬國船舶信號書』により行うこととした。

【貴艦ハ佛國司令長官ノ出港ノ時刻ヲ無線電信ニテ報告サレタシ】(「スウォーロフ」発)

【午後三時三十五分司令長官ハクアーベール海峡(注：湾内の小水道)ヨリ出港シ針路南ヲ取りタリ】(「リオン」発)

この日、海軍軍令部次長ベゾブラザフは、サイゴンを拠点にアジア海域で活動している巡洋艦「ディアナ」宛て、カムラン湾周辺でネボガートフ艦隊を待ちうけているロ司令長官に、伝えるべき情報を発信した。

しかし軍令部も、日本艦隊がすでに朝鮮半島の鎮海湾に集結していたことは、把握していなかった。

| П л а т а | | ТЕЛЕГРАММА | |
|---|-------------------|------------|----------|
| за перевод | Платеж | Откуда | Куда |
| | Руб. К. [Руб.] К. | Омьск | Переваня |
| Итого | | 20/IV | 1905 |
| Принят | | | |
| Копия | Сколько слов | | |
| | | | |
| <p>Командант...</p> <p>Генерал...</p> <p>Морской...</p> <p>Секретарь...</p> <p>№ 1935</p> | | | |

図3-5：電報3（ペテルブルグ発信サイゴン着信）日本艦隊の動静に関する情報

1905年4月20日（西暦5月3日）
ベゾブラゾフ（海軍軍令部副部長）
発

巡洋艦「ディアナ」艦長／ロジェ
ストウエンスキー侍従武官長宛

【完全ニ信頼スベキ情報ニヨリ
次ノコトガ伝エラレテイル。日本
艦隊ハ新暦ノ4月15日以降、自国
ノ海軍工廠カラ消エタ。日本艦隊
ハ現時点デハ佐世保ニ集結シテイル。
ポンフー列島（注：澎湖諸島）
ト琉球ノ最モ大キナニツノ島ノ周
囲ニハ機雷ガ敷設サレテオリ津軽
海峡ハ機雷デー杯デアル。NO.
1935 ベゾブラゾフ】（ロシア海
軍中央公文書館所蔵）

5月4日 ワン・フォン湾に復帰

午前8時、艦隊はワン・フォン湾に入り以前
のように錨泊した。

5月5日 第三艦隊リウ島付近

ネボガトフ司令官は、リウ島付近の洋上でシ
ンガポール駐在ロシア領事が汽船に託した、海
軍省からの次の電報を受け取った。

【「ロジェストウエンスキー」中將ハ全艦
隊ヲ率キテ無事馬拉加海峡ヲ通過シ4月22
日柴棍ノ北方「カムラング」灣ニ入ル爾後
ノ航程ハ不明ナリ陸路ヨリ浦鹽斯徳ヘノ交
通ハ差支ヘ無シ日本政府ハ「カストロマ」
ヲ病院船トシテ認定セリ若貴官ニシテ「ロ
ジェストウエンスキー」中將ノ艦隊ニ合同
シ能ハサル際ハ獨立シテ浦鹽斯徳ニ回航ス
ヘシトノ勅裁ヲ得タリ但シ其際ハ宗谷海峡
ヲ經由スルヲ可トセン陸上ノ戦況ハ變化無
シ我陸軍ハ公主嶺（注：長春の南）、吉林
線ニ在リ此電報ヲ汽船ヨリ接受セハ枝隊ノ
出動マテ同船ヲ監視シテ後孟買ニ赴カシメ
貴枝隊ニ關スル情報ノ速ニ傳ハラサル様注
意ヲ拂ハルヘシ

4月24日「ロジェストウエンスキー」中
將ヨリ『「ネボガートフ」隊ハ今一週間早
ク來リ得ヘシト考フルヲ以テ柴棍ノ前ニ於
テ我艦隊ニ就キ聞合ス様「ネボガートフ」

少將ニ告ケラレンコトヲ請フ「セント、ジ
アク」燈臺附近ニ於テ「リーウエン」ノ代
理者待チ居ルヘシ』トノ電報アリタリ狀況
以上ノ如クナルヲ以テ貴官ニ於テ爲シ得ヘ
シト認メナハ出來得ル限り其在泊日數ヲ短
減シ中將ノ指定セル地點ニ急航スヘシ】

この電報をネボガトフ司令官に手渡したのは、
前の年に全滅した旅順艦隊の巡洋艦「バヤーン」
の水兵バーブシキンであった。彼は3日間、マ
ラッカ海峡の洋上を漂流しながら、第三艦隊の
到来を根気よく待ち受けたのだった。

それにしても、満州の奉天（現瀋陽）は3月
10日に陥落していた。ロシア軍は最後の拠点と
した鉄嶺よりさらに北に敗走した。

敗戦の責任から解任されたクロパトキンに代
わって満州軍の総司令官に就任したりネウィッ
チ大將が、公主嶺に新総司令部を置いたのは3
月下旬であった。

しかし、大山巖総司令官が率いる日本軍の追
撃も鉄嶺の北、大小屯・昌図・英額城までで、
八面城・四平街・掏鹿村の線で援軍を待つロシ
ア軍と対峙した（『一億人の昭和史』1. 日清・
日露戦争、毎日新聞社、1979）。日本軍は砲弾
の補給が続かなかった。戦線は膠着した。

5月7日 ワン・フォン湾停泊中

カムラン湾から便船が郵便物とともに海軍省

からの電報をもたらした。曰く

〔「ネボガートフ」少将ノ枝隊ハ5月5日午前4時無事新嘉坡ヲ通過シタリ〕

艦隊将兵の士気は大いに高揚した。

しかし同日、ロ司令長官は再度の退去要求を受けた。司令長官は本国に向け発信した。

〔佛國人ハ我艦隊カ連續當地附近ニ滞在シテ艦隊ノ整頓ト戦闘力ノ増加トニカヲ致シタリトテ大ニ譴責スルモ之全然誣妄ナリト云フヘシ艦隊ノ「カムラング」灣ニ入りシハ4月14日ニシテ4月16日ニハ既ニ我等ニ退去ヲ促ス爲佛國海軍ノ一將官來ル其後艦隊ハ絶ヘス遍歴シアリ艦隊ハ既ニ一箇月彷徨セシ爲大ニ石炭ヲ消費シ機械ヲ損セリ〕

この日、フランスの商船「エリダン」がサイゴンから兵員用の靴を搭載して入港した。すでにノシベから注文しておいた物であった。長途の航海で靴が破損し、水兵は布片で草鞋を編んで履いていた。また、機関兵は裸足で火傷するものが多かった。^[3]

5月9日 ワン・フォン湾外で第3太平洋艦隊と邂逅

この日朝、艦隊はワン・フォン湾を抜錨、湾外に出た。その要請に、すくなくとも表面上は素直にしたがっているため、フランス側も好意的に対応している。

フランス巡洋艦「ギシャン」と旗艦「スウォーロフ」の間に無線電信が往復した。

【南方ヨリ來ル二隻ノ巡洋艦ヲ見ル】
 (「ギシャン」発)^[3]

敵ではなく第三艦隊の捜索に出た「ドニエープル」と「イズムルード」であった。

【長官ヨリ感謝ノ意ヲ表ス】 (「スウォーロフ」発)^[3]

正午頃、艦隊は第三艦隊の旗艦「ウラジミール・モノマフ」と交信に成功した。ロ司令長官は「モノマフ」の位置を尋ね、合同のため取るべき針路を示した。その際、ロ司令長官は「モノマフ」の副長の氏名を報告させ交信相手を確認したという。

午後3時頃、ネボガートフ枝隊は水平線上に本隊の黄色の煙突を遠望した。

枝隊はワン・フォン湾外20マイルの沖合で艦隊と合同した。ロ司令長官とネボガートフ少将は相擁して合同を祝福し合った。両艦隊の将兵は“ウラー”と喚声をあげた。

ネボガートフ枝隊は第二太平洋艦隊に編入され、ロ司令長官の令達にしたがって煙突を黄色に塗り変えた。司令長官は隷下の艦隊に令達した。

〔「ネボガートフ」少将ノ枝隊ト合同シタルヲ以テ我艦隊ノ勢力ハ敵ノ海軍力ニ匹儔スルニ止ラス戦艦ノ數ニ於テ既ニ敵ヲ凌駕ス〕

しかし艦隊将兵は、ネボガートフ枝隊が本国からもたらした郵便物が、期待に反して少なかったことに落胆した。

5月10日 艦隊クアベに入湾

艦隊はこのクアベ／ヴァン・フォン湾で4昼夜にわたり石炭、食糧などの補給、機関などの点検・修理を行った。戦艦戦隊はワン・フォン湾で載炭作業を継続した。

クアベ在泊中、艦隊では兵士に講話したり、愛国的な内容のスライドを見せるなどして戦意高揚に努めた。

ネボガートフ枝隊が合流したのでフランス政府はロシア政府に再び抗議した。海軍省はロ司令長官に

〔植民地官憲ノ提言スル所ニ適合スル様行動スヘシ〕

と命令した。

5月11日 艦隊ヴァン・フォン湾に投錨

ロ司令長官は命令第223号を発して哨戒任務の怠慢について注意を喚起した。たとえば5月5日に「ドンスコイ」が沖の方に探照灯の光を認め無線電信で報告したにもかかわらず、より近い位置に居た艦がその光源を確認する行動を執らなかつたなどである。^[3]

5月12日 艦隊ヴァン・フォン湾在泊中

艦隊がウラジオストックに向けて航行の途上で、本隊を離れて無線電信の通信距離外に出た艦船が敵と遭遇した場合の通信運用方法について、コロソ参謀長はロ司令長官の承認を得た上で艦隊に次のように通達した。

【(その場合) 一名ノ電信技手ヲシテ強力ノ電波ヲ起サシメ次テ他ノ電信技手ヲシテ我電信ノ答電ヲ得タル如キ状ヲ装フカ爲メ微力ノ電波ヲ起サシムヘシ斯ノ如クニシテ敵ヲシテ我レハ本隊ト無線電信ニヨリ通信シツ、アルモノト思ハシムルノ手段ヲ執ラレタシ】^[3]

一艦二役、さすがは名参謀長である。『日本海海戦：その情報通信からの視点2』に述べられている智将マカロフも思い及ばなかつた奇策

である。しかし・・・下述の通り、同湾出動の2日後の5月16日、ロ司令長官は艦隊に全面的な無線封鎖を命じたのだった。

5月13日 艦隊ヴァン・フオン湾在泊中

この日、サイゴンからネボガトフ枝隊の病院船「カストロマ」が来航、艦隊に合流した。

本隊の将校に比べて枝隊の将校の方が活気にあふれていた。本隊ではロ司令長官と参謀および高級将校との間にほとんど意思疎通がなかった。

第三艦隊のネボガトフ少将とリーシン大佐は後に次のように語っている。

〔先づ第一ノ手段トシテ艦隊ノ乗員ハ一家族ノ如ク結合シ上官ト部下ノ關係ヲ親密ニシ相互ノ隔意ヲ去リ互ニ信用ヲ充分ナラシムルコト肝要ナリ尚艦隊司令長官ハ司令官及艦長ト屢會合シ總テ戦争ニ對スル計畫及運動法其他各種ノ場合ニ處スヘキ問題ニ就キ仔細ニ協議ヲ遂ケ又艦隊司令長官ハ進ンテ部下ニ接近シ其意見ノアル所ヲ諒知セシメ又部下ノ建策採用ニ努ムヘキナリ然ルニ長官ハ如何ニシテ浦鹽斯徳ニ無事到達スヘキヤ換言スレハ朝鮮海峡ヲ通過スル航路ヲ取ラントスルヤ將又日本ノ周圍ヲ迂回スル航路ヲ取ラントスルヤ未一回モ如上ノ問題ニ關シテ會議ヲ開キタルコトナクスクテ乗員一同ハ對馬沖海戰當日ノ正午頃マテ何等艦隊ノ行動ニ就イテ知ルモノナカリキ〕

2.9 ウラジオストックに向けて

ロ司令長官と幕僚たちとの間のコミュニケーションが断絶したまま戦機は熟した。日本艦隊の中央を強行突破し、皇帝の侍従武官長である自身が座乗する旗艦に追従し得る艦船のみがウラジオストックに到達する戦術であれば、幕僚の意見などどうでもよい。無線機の不調、および／あるいは、通信担当将兵の熟練不足は“文字板”を掲げる視覚通信方式（4月20日参照）で補う悲壮な決意も固めた。

5月14日 艦隊ヴァン・フオン湾出航

午前5時、第三艦隊と合同し勢力を拡大した第二太平洋艦隊は満を持して、日本近海に向けてクアベ湾から出動した。この日天気晴朗。

（巻頭グラビア図10参照）

しかし、自身とフェリケルザム少将の健康状態に一抹の危惧の念を抱くロ司令長官は出動に

先立ち、海軍省に宛て次の電報を発信した。

〔「ネボガトフ」枝隊ト合同ス「フェリケルザム」少将ハ臥病五週間ニ及フモ未タ起ツ能ハス容體益々險悪ニ陥ル本職モ僅ニ歩行シ得ラルル程ニシテ甲板ヲ一周スルニ堪ヘス故ニ至急健全ニシテ適任ノ海軍總指揮官若クハ艦隊司令長官ヲ浦鹽斯徳ヘ差遣セラレンコトヲ請フ右ノ次第ニテ艦隊ノ状態頗ル不良ナリ然レトモ本職ハ斃ルルマテ海軍總指揮官ノ下ニ在リテ艦隊ノ指揮ヲ繼續セントス〕

決意のほどは立派である。しかし巷間、ウラジオストック到着と同時にロ司令長官解任の噂も流れていた。あるいは、長官はその先手を取ったのかも・・・。

そしてロ司令長官は、出動に先立ち慎重に次の措置を講じた。

輸送船団の配備

- (1) 輸送船の一部を上海に向わせた。この輸送船には次の場合に必要な補給対策を講じるよう命じた。すなわち
 - イ) 朝鮮海峡で艦隊が敗北し上海に退却した場合
 - ロ) 艦隊がウラジオストックに到達しその後の作戦行動を継続スル場合
 - ハ) 艦隊から分離して活動する下記の巡洋艦
 - (a) (b) (c)に補給の必要ある場合
- (2) 残りの輸送船をサイゴンに集結させ、次の場合に必要な対策を講じるよう命じた。すなわち
 - ニ) 艦隊が上海以南に退却した場合
 - ホ) 艦隊がウラジオストックで石炭を十分補給できない場合、あるいは同軍港を根拠地として使用できない場合
 - ヘ) 補助巡洋艦に補給の必要が生じた場合
 全力を尽した上での勝敗は時の運。ロ司令長官は、4月10日にスウェントルジエッキー参謀が具申した意見をも考慮してか、麾下の艦隊を率いて決戦に臨むに際して、自身の敗退をも念頭においた周到な対策を講じたことは注目にあたする。

“（敵艦隊は）誓ってこれを撃滅し、陛下の御心を安んじ奉ります”と明治天皇に奉答した東郷司令長官に、この発想はなかった。

巡洋艦の哨戒配備

さらにロ司令長官は、4隻の巡洋艦にそれぞれ次の任務を命じた。

(a) 「クバン」は本州太平洋東岸を遊弋して、バンクーバー、サンフランシスコあるいはホノルルから横浜に至る航路を哨戒する

(b) 「テレク」は四国南岸を遊弋して、南方から神戸、横浜に至る航路を哨戒する

(c) 「リオン」と「ドニエプル」は航路途上で艦隊を離れ輸送船を上海まで護送した後、黄海の中部及び南部を遊弋しながら哨戒活動を行う

5月15日 正午位置 13° 58'N 112° 51'E (海南島沖)

病院船「アリヨール」と「カストロマ」を先行させて艦隊は進航した。

巡洋艦「ドミトリー・ドンスコイ」は電信で

【潜水艇ノ潜望鏡ト覺シキモノ見ユ】

と通報してきたが、漂流物を誤認したものだった。

5月16日 正午位置15° 42'N 115° 40'E (ホンコン南方海上)

ロ司令長官はこの日以降、艦隊に無線封鎖を命じた。

5月17日 正午位置18° 04'N 117° 51'E (ルソン島北西海上)

5月18日 正午位置19° 32'N 119° 44'E (ルソン海峡西側)

この日、艦隊は貨物船「オールドハミヤ」(イギリス船籍)を抑留した。

5月19日 正午位置19° 44'N 120° 56'E (ルソン海峡西側)

ロ司令長官は、日本列島(台湾と南西諸島を含む)に接近した際の舷燈をも含めた灯火管制と、浮流機雷を発見した場合の対応について令達した。

艦隊は前日に引き続き、貨物船「オスカー」二世(ノルウェー船籍)を抑留した。

午後11時30分、艦隊は68度に変針した。

5月20日 正午位置 20° 41'N 122° 23'E (ルソン海峡東側)

午前4時25分、艦隊は50度に変針、バタン島とバレンタイン島の間を通過した。

5月21日 正午位置22° 29'N 125° 00'E (台湾東方海上)

午前9時10分、艦隊は針路を35度として、ウラジオストク到着を急ぎながらも日本軍の監視網を避けて、台湾を大きく東に迂回する航路を採った。

5月22日 正午位置25° 09'N 126° 13'E (宮古

島北東海上)

午前5時30分、宮古島と沖縄島の間を通過すべく艦隊は針路を23度とした。記録によると艦隊はこの日、沖縄の漁師によって発見されたという。

5月23日 正午位置27° 15'N 125° 21'E (沖縄島西方海上)

この日ロ司令長官は、海戦中の艦隊の詳細にわたる行動に関して最終の令達を全艦隊に配布した。その最後は次のように結ばれていた。

[艦隊ノ直接目的トスル所ハ浦鹽斯徳ニ達セントスルニ在ルヲ各枝隊司令官ハ此主旨ヲ體シ又此目的ヲ達スルニハ艦隊ノ協力ニ依ラサルヘカラサルヲ記憶スヘシ]

午後、艦隊の各艦は洋上で輸送船から最後の載炭を済ませた。

北上するにしたがって次第に寒さが感じられ始めたこの夜、カムラン湾以来病臥中のフェリケルザム少将が死去した。しかしロ司令長官はその死を秘匿した。

そしてこの夜以降、艦隊は無線電信に加えて発光信号の使用も禁じられた。

5月24日 正午位置29° 38'N 124° 17'E (上海南東海上)

この日午後、巡洋艦「リオン」と「ドニエプル」は、輸送船を護衛して上海に向った。両艦は東経122度20分の子午線(上海沖)まで護送した後、上記(c)の命令にしたがって、黄海での哨戒任務についた。

5月25日 午前8時の位置31° 00'N 123° 11'E (上海東方海上)

艦隊は日本艦隊の無線電信を明瞭に受信した。巡洋艦「ウラル」はその強力な送信出力で日本艦隊の通信妨害の許可を求めた。しかしロ司令長官は、艦隊の所在を悟られることを恐れて、これを許可しなかった。

5月26日 正午位置32° 40'N 126° 30'E (濟州島南方海上)

艦隊は一路、対馬海峡をめざしている。

午後4時30分、旗艦「クニャージ・スウォーロフ」が{戦闘準備}の信号旗を掲げた。

4. 艦隊の遠征を支えた情報と情報収集/伝達の手段

ロジェストウェンスキー司令長官率いるほぼ

50隻の大艦隊、第二太平洋艦隊は、リバウから対馬まで1万マイル（18,000km）に及ぶ大航海を上述のように、みごとに成しとげた。大航海時代にも例をみない世紀の壮挙であった。

4.1 艦隊を支えた情報

その大艦隊の長途の遠征を支えたのは、まさに情報であった。それらは

- ①本国からの作戦・運航に関する命令／敵状に関する情報（誤ったものも・・・）
- ②①への復命、報告、意見具申
- ③艦隊内での作戦・運航に関する命令／敵状に関する情報（錯誤によるものも・・・）

- ④③への復命、報告、意見具申
 - ⑤燃料である石炭（ロ司令長官が悩まされ続けた）、食料ならびに飲料水など補給の手配／運搬に関わる情報
 - ⑥気象／海象に関する情報
 - ⑦航海と寄港地に関する情報
 - ⑧船体、機関、兵器、無線機器などの保守・修理に関する情報
- などであり、加えて1万2千人に及ぶ将兵の士気を維持するために不可欠な情報は
- ⑨家族／知人などの消息
- であった。

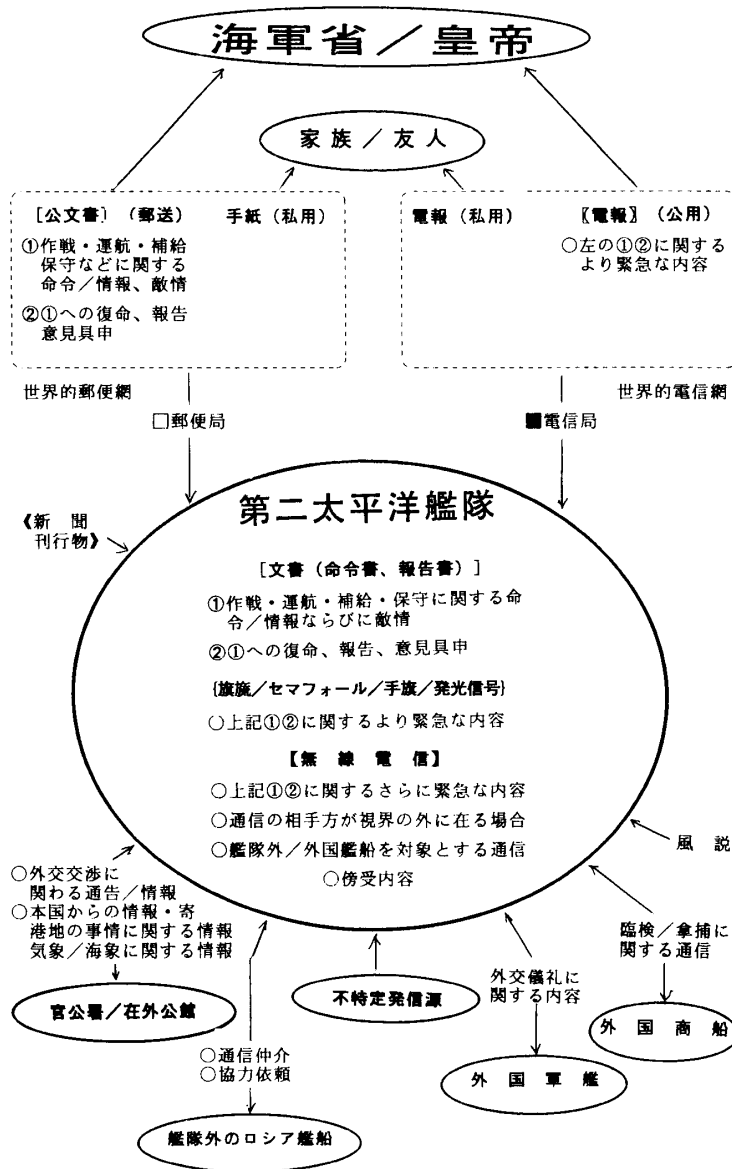


図3-6：第二太平洋艦隊を中心とした情報の流れ

4.2 艦隊の情報収集／伝達手段

1874年に万国郵便連合 (UPU) が設立され国際郵便が送達されるようになっていた。ロシアはその第1回大会議 (ベルン会議) 以来の加盟国である。そしてこの頃から海底ケーブルが大陸の間を結んで、世界各地間に国際電報が疎通し始めた。国際通信を規律する万国電信連合 (ITU) の第4回全権委員会議が1875年にペテルブルグで開催された。

日露戦争の直前にG.マルコーニとA.S.ポポフが無線電信を開発した。ポポフは、その無線電信をロシア艦隊に設備すべく努力を重ねた。

第二太平洋艦隊の東洋大遠征を支えた情報を収集し伝達できたその背景は、このように設定されていたのである。

上に示したように艦隊の航跡をたどることによって、艦隊は国際電報、国際郵便、無線電信ならびに伝統的な船舶の通信手段を次のように活用したことが分かる。

(1) 艦隊とロシア本国相互間

①艦隊と海軍省／皇帝相互間の電報

②艦隊と海軍省／皇帝相互間の文書 (郵送による命令書、報告書、手紙など)

③私信 (家族／知人などからの電報／手紙)

(2) 艦隊内部の艦艇相互間

④文書による通達

⑤旗旒／セマフォール／手旗／発光信号

⑥無線電信 (艦隊外のロシア艦艇との交信を含む)

(3) 艦隊外部からの情報収集手段

⑦外国艦船との無線電信交信

⑧無線電信の傍受

⑨寄港地で入手する新聞

⑩寄港地での風説

艦隊はそれらの通信／情報収集手段を可能な限り巧みに利用した。それらを図示すれば第3.6図の通りである。

5. むすび

ロジェストウェンスキー司令長官率いる第二太平洋艦隊が、その世紀の大航海を完遂できたのは“・・・からの視点1”に詳述されている世界的な電信網と郵便配達システムに負うところが多い。

その電信網と郵便システムなくして、艦隊が

各寄港地とロシア本国政府との間の情報疎通は望めず、したがって艦隊の燃料である石炭を始めとする必需物資の確保・補給は不可能であった。折りからポポフが鋭意開発した無線電信を含めて、艦隊が駆使した情報収集／伝達手段は、上記4に述べたところである。

しかし同時にロ司令長官は、通信衛星と光海底ケーブルで構成される今日の世界的な情報通信網の嚆矢である、その電信網を経由して本国からもたらされる情報に翻弄された。はるか洋上に在っては、情報の真贋を判断する基準を持ち得なかったからである。

いつたん港を出た後は波まかせ風まかせで、良くも悪くも自身の判断に頼るしかなかった大航海時代の航海者には無縁だった悩みを、ロ司令長官は初めて悩んだのだった。

そして100年前の司令長官の悩みは、マスコミやインターネットさらには携帯電話などからの過剰な情報の渦に溺れそうになっている、我われ現代人の悩みを先取りしたものにほかならない。北海ドッガーバンク事件をけして嗤うことはできないのである。

ともあれ日露戦争の直後から、一般商船も含めた船舶との間で無線電報を送受するための陸上の無線局 (海岸局) が、世界中に建設され始めた。電信局の所在地まで艦艇を走らせる必要はなく、その通信圏内から無線電報を発信すれば、海岸局が中継し国際電信回線を経由して瞬時に世界中に伝送されるシステムが構成された。

第二太平洋艦隊の情報活動が、この国際海上無線電信システムの需要開拓の先駆的な役割を果たした。

文 献

- [1] 露國海軍軍令部編纂『千九百四、五年露日海戦史』第六巻、海軍軍令部訳・刊
- [2] ポリトフスキー『露艦隊來航秘録』海軍軍令部訳・刊
- [3] 『戦利艦押収書類翻譯 (戦艦「アリヨール」艦歴)』海軍軍令部刊
- [4] 電波監理委員会『日本無線史』第十巻、昭和26年
- [5] パヴロフ・ペトロフ・ヂェレヴァンコ著／左近毅訳『日露戦争の秘密』成文社、1994年